ヲ哥後十〇十八

外部より自己を證明するを需めざるは是れ全く己を神に任せたることを示すものなり蓋聖徒パウロの云るごとく自ら譽るに非ずして主の譽るもの可とせらるればなり

夫心中神と共に歩きて如何なる外部の愛情にも繫がれざるは靈に屬する人の狀態なり

第七章　總ての物に愈りて耶蘇を愛すべき事

(一)耶蘇を愛し又耶蘇の爲に己を輕んずるの道を曉るも

イ太十〇三七　ロ來十三〇五

のは福なり汝は其愛する主の爲に汝の愛する者を棄べきなり蓋耶蘇すべての物に愈りて愛せられんと思ひたまへばなり受造物を愛するの愛は虛僞にして永續せず耶蘇を愛する愛は誠實にして永續す受造物に執着するものは衰亡すべき者と共に衰亡し耶蘇を懷くものは泰然として永遠に存立すべし

(二)されば彼を愛し間斷なく彼を友とせよ彼は諸ての者離散する時にも汝を棄ず又究極に於て汝の滅ぶることを許したまはざるなり汝は好むと好まざるとに拘

○ヨハネ十二
三十六十

はらず早晩總てのものと相別れざるべからず活るとき死せる時も常に耶蘇に接近して全く其信義に依賴せよ彼は誰も助け能はざる時に單り汝を祐け得るものなり

汝の愛する耶蘇は其性質として汝が他の者を兼愛することを許さず彼は汝が心の全部を占領し之を寶座として王の如く座せんことを欲したまへり汝もし諸の受造物を全く自己より放逐することを得ば耶蘇は欣然として汝と共に棲たまはん

ハ十一
〇七
ニ四十
〇六、七
彼前一
二四

（三）汝如何なる物にても耶蘇に托せずして之を人に托し置かば殆ど之を失ふに異ならず風に吹かるゝ葦を恃むことなく又之に倚るること勿れ蓋肉は皆草なり又其榮華も悉く花の如くに萎むべければなり

汝もし只人の外貌にのみ着目せば欺れ易からん蓋汝もし他人より安慰と利益とを需むる時は屢損失を招くべければなり然れども若し總ての事物の中に耶蘇を求むる時は必らず耶蘇に逢ふべし倘し又自己を求むるときは亦自己にも逢ふべし然れども之に由て

滅亡を招かん何となれば人若し耶蘇を求めざれば自ら受るの害全世界と諸ての仇敵より受る害よりも尚甚しければなり

第八章　耶蘇と厚く親しむ事

(一)耶蘇偕に在さば萬事安寧にして何事も困難に見ざれども耶蘇もし偕に在さざれば百事困難なり

耶蘇もし我らの心に語り給はざる時は有ゆる他の慰藉も數ふるに足らず然れども耶蘇もし唯一言を語り給へばわれらは大なる慰藉を感ず往昔マリアハマル

イ約十一〇二八　ロ太十六〇二六　ハ路四〇二十三

タより師來りて汝を呼びたまへり」との言を聽し時直に其哭たる所より起しにあらずや耶蘇紅涙の中より墨の喜悅に呼びたまふ時は實に幸なる哉

汝もし耶蘇と離れ居るときは乾燥無味なること如何ばかりぞや若し耶蘇よりも他のものを望まば愚にして空なること如何ばかりぞや是は汝の爲に全世界を失ふよりも尚大なる損失にあらずや汝耶蘇によらずして世より何の益をか得ん耶蘇を離るゝことは悲慘なる地獄に在るが如く耶蘇と共に居ることは喜ばし

羅八〇三五
太十三〇四四
〇二六 日太十六
路十二〇二一
〇二八 路十一

き樂園なり耶蘇倘し汝と共に在せば如何なる仇敵と雖も汝を害すること能はざるべし耶蘇を得る者は善き財則ち總ての善きものに勝る善きものを得るなり然れども耶蘇を失ふものは實に大なる損失をなし則ち全世界よりも大なるものを失ふなり耶蘇によらずして住むものは最も貧しき者にして耶蘇と共に禍に棲むものは最も富るものなり

(二)耶蘇と共に語るの道を知るはこれ大なる練達なり又耶蘇を去じめざる道を曉るは是れ大なる智識なり汝謙遜にして平和なるべし然らば耶蘇汝と共に居たまはん汝敬虔にして謐穩なるべしさらば耶蘇汝と共に止り給ふべし

汝もし翻て外部の物に向へば直に耶蘇を去らしめ其恩寵をも失ふべし而して若し耶蘇を去らしめ彼を失ふときは汝誰にか遁がれ誰をか友とせんや汝は一人の友なくして幸福に棲むこと能はず耶蘇もし他のものに優れる汝の友ならずば汝は實に氣鬱し心淋しかるべし此故に汝もし他のものを恃み或は悅ばゝ是

智者の所爲にあらず全世界は汝の敵となるも耶蘇の恚に觸れざるを可とすべしされば總て汝の親愛する者の中にて耶蘇のみを特に親愛すべし

（三）耶蘇の爲に諸の人を愛し又耶蘇の爲に耶蘇を愛すべし耶蘇基督のみ殊に愛すべき者にして只彼のみ渾ての朋友よりも善良忠實なることを認めらるゝなり彼にあかて彼の爲に仇をも味方をも共に愛すべし又耶蘇を知り耶蘇を愛する惠を彼らに與へ給はんことを願るべし

（詩三四八十四）

特別に稱讃せられ親愛せられんことを願ふて

と勿れ是れ卓絶無比なる神のみ斯くせらるべきものなればなり他人其心中特別に汝を慕ひ或は汝わが心中特別に他人を愛せんことを望むこと勿れ只汝と他の善人各自の心中に耶蘇の住み給はんことを望むべし

汝心を潔白にし自由ならしめよ被造物の爲に心を絆さるゝこと勿れ汝もし主は如何ばかり慈愛に富みたまふかを探知するの自由を得んと欲せば常に潔き

心を以て神に向ひ己を赤裸にして神の前に投出すべし又神の恩惠は汝に先ち汝を導くに非ずんば汝悉く萬物を棄てゝ唯神にのみ結合し得る所の幸福に達せざるべし夫れ神の恩寵人に臨む時は萬事を爲すに力あれども一朝之を失ふ時は彼は無力孱弱にして恰も鞭笞場に置かれたるが如し此場合に於ても汝垂頭て失望すべきに非ず只靜かに己を神の聖旨に一任し縱令如何なる事變は汝に打來るも耶蘇基督の榮光の爲に之を忍ぶべし何となれば嚴冬の後には盛夏至り

暗夜の後には白晝來り風雨の後には快晴に復すればなり

第九章　慰藉の缺乏する事

（一）我等にもし神の慰藉ある時は人の慰藉を賤しむこと難きにあらず神と人との慰藉なき時は之に耐へ神の榮光の爲に快く心の寂寞なるを忍び己の爲に何をも求めず己の功績をも顧みざることは實に難中の難事なり

汝もし恩寵の來るときに於て欣然敬虔の念を發する

とも何の譽むべきことかあらんや此時機は各人の皆
冀望する所なり神の恩寵に駕するものは快然として
進み全能者に運ばれ至尊の嚮導者に導かるゝものは
其重擔を感ぜざるも何の奇異かこれあらん
吾人は常に多少の物に由て慰藉を得んことを望む而
して人其自己を棄るは容易ならず
聖なる殉教者ローレンテオは其長老と共に世に克て
り其故如何となれば彼は此世に於て快樂と認めしも
のは悉く之を藐如し基督を愛するが爲には神の主座

長老にして彼が深く愛せしセクストを奪ひ去らるゝ
ことすら尚忍びたればなり
譯者註す羅馬府の大監督セキストは紀元二百五十
八年迫害の爲に殺害せられんとするとき其屬從執
事ローレンテヲの歎を慰めて曰く「悲しむなかれ
汝三日の後にわれに從はん」と
されば彼は造物主を愛するが爲に人を愛するの念に
勝ち人の慰藉よりも寧ろ神を悅ばすことを撰たるな
り斯の如く汝も神を愛するが爲に親戚愛友にすら別

るべきことを學ぶべし又友人に棄らるゝ時も之を忍び難きことゝ思ふ勿れ終には吾人皆互に相別るべきものなればなり

人は充分に己を制御し其全心を神に傾け得るに至るまでは永く心中に劇戰せざる可からず人もし己を恃むときは人の慰藉に終り易し然れども誠實に基督を愛し熱心に諸ての德を慕ふものは安慰の爲に逡巡し肉体の快樂を需むることなく却て難事に耐へ又基督の爲に勞苦を忍ぶことを怡ぶなり

イ提前四〇四　ロ代下廿五〇九

(二)是故に神より靈の慰藉を賜はりたる時は感謝を以て之を領くべし然れども是れ神の恩賜にして汝の功勞の報酬にあらざることを曉るべし汝此恩賜を誇ることなく過度の喜悅を爲さず又空しき慢心を生ずることなく却て遜り愼み又渾て汝の動作に於て恐れ戰くべし蓋其時期は逝りて誘惑之に次ぐ可ければなり假令慰藉を失ふたる時と雖も直に失望することなく謙遜と忍耐を以て天より降下さる恩澤を待つべし何となれば神は再び豐充なる恩惠と慰藉を汝に與ふる

能力あればなり

此は神の道に經驗あるものには決して新奇のことにあらず蓋貴き聖徒及び古の預言者等は屢回斯る變遷を實踐したればなり是故に神の恩寵に浴せし一人は云く「我安けかりし時に謂らく永遠に動かざるゝことなからん」と然るに此恩寵の缺乏せし時に彼は又自ら實驗せし心狀を述て云へらく「汝聖顏を隱し給ひたれば我怖惑ひたり」とされど彼は此逆運の中に少しも失望することなく一層熟心に主に求めて曰く

詩三十六章五十一節

「主よ我なんぢに呼はり我神は祈らん」と終に其祈禱効驗ありしを以て其聽れしことを證言して曰く「主はわれに聽き我を憫み給ひたり主はわが祐となり給ひたり」と而して主は如何にして彼を祐しや彼は曰らく「爾は我哀哭を以て喜悅に變へ又爾は歡喜を以てわが帶としたまへり」と

貴き聖徒すら斯の如く待遇せられしとせば孱弱無力の我等は假令冷熱常に定りなきも決して失望すべきにあらず蓋神の靈は聖意のまゝに來往すればなり是

故に幸福なるヨブは云へり「爾は朝早く人を看鑒し時分ず彼を試み給ふ」と

（三）されば我は專一に神の大なる憐恤を恃み只天の恩惠を希望の外に何をか恃み又何をか望とすることを得んや夫れ我に善良の士敬虔なる兄弟信實なる友人あり又聖なる書秀麗なる論説美妙なる歌頌を蓄ふると雖も若し神恩は離れわれは己が究乏中に棄られたる時には是等のものは皆殆ど無益となり又興味なきものとなるなり斯る時に之を醫するの道は忍耐するにあ

り又神意に從ひて己を棄るにあり此外更に愈れる良法あることなし

我交る所のものに就て見るに如何に敬虔篤信の人と雖も時々神恩を失ひ又多少熱心を冷却せざる者なし如何に卓然感化されたる聖徒と雖も時として誘惑に遭遇せざりしもの曾て有ることなし蓋神の爲に災害を受て習練せざるものは神の貴重なる奥義を默想するに足らざればなり而して預め來る所の誘惑は後に降下する安慰の常兆なり是れ誘惑によりて試みられし

ヘ默二〇七

ト哥後十二〇七

者には天の慰藉を賜ふの約あるが故なり主曰く「勝を得るものにはわれ生命の樹の果を食ふことを許さん」と然れども神の慰藉を降し給ふは人をして禍に耐ふる勇氣を增さしめんが爲なり又誘惑の之に繼ぐは彼をして何等の功德をも誇ることなからしめんが爲なり惡魔は曾て睡ることなく又肉慾は未だ死せざるなり是故に汝絶えず戰備を怠ること勿れ汝の右にも左にも常に讐はざるの讐敵あり

第十章　神の恩惠を謝すべき事

イ伯五〇七

ロ路十四〇廿七

(一)汝勞苦の爲に生れながら何故に安息を求むるや安慰を欲ふよりも寧ろ忍耐に志し歡樂を願はんよりも却て十字架を負ふべし

俗塵に染る者も若し常に靈の喜悅と安慰を受ることを得るとせば欣然之を受けざるものあらんや何となれば靈の安慰は世の渾ての喜樂と肉の快樂とに優ればなり總て世の歡喜は不潔なるか然らざれば空なり唯靈の歡喜のみは爽快にして清潔なり是れ神が純正なる心情中に注入し給ひしものにて德より其源を發

したればなり

然れども人は其欲するまゝに神より出る是等の安慰を常に領け得るものなし是れ誘惑の時期は遠く離れざればなり

自己を恃むこと大にして其心專横なるは天より降下する恩澤と大に矛盾せり

神は我儕に慰藉の恩寵を與へて善を行ひ給ふ然れども人は感謝せず又總て之を神に歸せずして惡を行ふなり故に恩寵の賜物はわれらの上に流下せず是れ我

儕が惠與者に感謝せず又此等を悉く其本源に歸せざるが爲なり夫れ恩寵は正當に感謝する者の上に常に降りて倨傲者の有ところは覆れて之を謙遜者に與へらるべし

我より痛悔の念を取去る處の慰藉はわれ之を望まず又我を高慢に導く所の高尚なる默想はわれ之を愛せざるなり何となれば高きもの悉く聖なるにあらず樂しきもの皆善なるにあらず渾ての願望純潔なるにあらず我儕に貴重なるもの皆神の悦び給ふ所にあらざ

ればなり我欣然受る所の恩惠は我をして常に謙遜ならしめ敬畏の念を感せしめ又自己を棄るに躊躇せしめざるものなり

(二)恩寵を與られし爲に教訓を受け又之を取去られし爲に懲戒を受けたるものは敢て寸功をも己に歸することなく却て自己の貧くして裸なるを悟るべし神のものは神に獻げ汝のものは汝に歸すべし之を換言すれば則ち神には其恩寵を感謝し己には罪と之に伴ふ刑罰のみを歸すべきことを自白すべし

汝常に己を最も低き地位に置くべしさらば汝最も高き地位を與へられん蓋最も低きものなければ又最も高き者もあらざればなり神の前にて最も貴き聖徒は自己の前には最も卑しきものと見ゆるなり彼等ますます尊榮を受れば其心愈謙れり眞理と天の榮光に盈たるものは決して空しき榮華を願はず確然神を以て基礎となすものは決して驕る所なし又其與へられしものは如何に善良なるものにもせよ悉く之を神に歸する人々は人類相互の光榮を求めずして唯神へ

り出る所の榮光のみを望み就中神の聖德により又其諸聖徒によりて神の榮光の彰れんことを望み常に此一事を追求むるなり

是故に最小の賜といへども謝して之を領くべし然らば汝更に愈れるものを領るに足る者とならん最小なるものも尙之を最大のものゝ如く思ふべし否なきが如き微々たる賜をも特に貴重なるものゝ如く思ふべし汝若し惠與者の品位を思ふ時は如何なる賜と雖も小なる者若しくは價直なきものと見ゆることなかるべしそは最高き神より賜はるものは小なるものあらざればなり加之神は假令刑罰と懲戒とを予へたまふとも是れ感謝すべきことゝすべし蓋神が我儕に遭しめ給ふことは常に我儕の安全を謀りて之を行ひ給へばなり

神の恩寵を保持せんことを欲ふものは宜しく恩寵を予へられたる時に感謝し之を取去られたる時に忍耐し其恩寵の再び歸り來ることを祈り又之を失はんことを恐れて謹肅謙遜すべきなり

イ可十〇
三八
同十四
三六〇

第十一章　耶蘇の十字架を愛する者寡き事

(一)耶蘇に屬して天國を愛する者多けれども其十字架を荷ふ者は僅少なり慰藉を熱望する者は多けれども患難を願ふものは尠し其食卓に陪する者は數多れれども彼と共に斷食する者は稀なり人皆基督と共に悅ばんことを願へども彼の爲甘んじて患難に堪ふるものは稀なり耶蘇に從ふてパンを擘くに至るものは數あれども其苦悶の盃を飲むに及ぶ者は少し其奇蹟を敬信する者は許多あれども其十字架の屈辱に從ふ者は

ロ約十一
〇三六

稀なり多くの人は災厄に罹らざる間は耶蘇を愛し又彼より多少の慰藉を領る中は之を讃美尊揚すると雖も耶蘇もし其影を收め須臾にて彼等を離るれば忽ち不平を起し或は過度なる憂悶に陷るなり

然れども自己の或特殊の安慰の爲にあらずして耶蘇の爲に耶蘇を愛するものは災厄斷腸の時と雖も彼を讃美し最大安慰の時と更に異ることなし假令此等の人に安慰を予ふることを好みたまはざるにもせよ彼らは尙主を讃美し又常に感謝することを望まん嗚呼

ハ腓二〇
二一

利己若くは自愛の念を交へずして純一に耶蘇を愛するの愛は其強きこと如何ばかりぞや

絶ず慰藉を求めて止まざる者は皆被雇人と稱すべきにあらずや常に自己の利益をのみ謀るものは基督を愛するよりも寧ろ自己を愛することを自ら表すにあらずや

（二）報酬を望まずして喜で神に事ふる者果して何所にかあらん如何に靈性に進みし人といへども有ゆる地上の事物を幕ふの念を脱せしものを見出すは稀なす誰

二箴三一
〇十

ホ歌八〇
七

か實に其心貧くして受造物に依賴するの念を全く脱せしものを看出すことを得んや若し斯るものあらば其價眞珠よりも貴し

人若し悉く其家産を献ぐるとも徒爾なり又大なる悔改を爲すも益なく假令百科の學藝に通曉するとも尚未だ遠し又若し其德は高く敬虔に熱心なりと雖も尚大に缺る所あり卽ち最も缺べからざる一事を缺なり其一事とは何ぞや曰く萬物を抛擲すると共に己を棄て完く自己より脱して毫も自愛の念を抱かざる是

ヘ路十七
○十

ト詩廿五
○十六

なり然して自己の知りたる限り其爲すべきことを爲し遂げ尚自ら何も爲さざるものゝ如く思ふべし其尚まるべき功勞をも深く重ずることなく實に益なき僕なりと自白すべし是れ眞理の云る如し曰く「汝等命せられしことを皆行したる時も我らに無益の僕なりといへと」

此に至りて彼は實に其心貧くして飾なきことを得て預言者と共に「我は孤獨にして貧し」といふことを得ん然れども己と萬物を棄て己を最も下位に置くこと

イ太十六
○二四
ロ太廿五
○四一

○三十
ハ詩百十
二○七

を知る者に優りて富且强く自由なるものあることなし

第十二章　聖なる十字架の公道を歩むべき事

(一)「己に克ち十字架を取りて耶蘇に從へ」とは多くの人の難しとする言なれども「罰せらるべき者よわれを離れて熄ざる火に入れよ」との終極の語を聞くは之よりも更に難かるべし夫れ今の時に十字架の語を聞き喜で之に從ふものは彼の時に至りて限なき刑罰

ニ太廿四
〇三十

の宣告を聞くの怖なし主が審判の爲に來り給はん時天に於て十字架の休徵現はるべし此時に當り十字架の僕即ち今世に於て十字架に釘られし基督に準ひしものは皆大に心を安んじて審判者たる基督に近くべし然るに汝を一個の帝王たらしむる所の十字架を負ふことを恐るゝは何故ぞや

夫れ十字架には拯救あり生命あり敵を防ぐの警衛あり天の快樂のうるはひあり心の强みあり魂の喜悅あり最高の德あり又完全なる清潔あるなり十字架を措

ホ路九〇
二三
ヘ約十九
〇十七
ト提後二
〇十一
チ羅八〇
十七

てまた他に靈魂の救なく限なき生命の希望あらざるなり是故に「汝の十字架を取て耶蘇に從ふべし」されば汝永遠の生命に入らん耶蘇其十字架を負ひて先立汝の爲に十字架上に死たまへり是れ汝をして亦其十字架を擔ふて主と共に十字架上に死せんことを願はしめんが爲なり汝もし主と共に死せば主と共に活き主と共に刑罰を受れば又主と共に榮光をも領くべし

看よ諸ての事は十字架にあり吾人其上に死するに因

十字架八〇
〇十一
聖書二

〇十字
ヘ聖十八
二三
本聖書八〇

て萬事皆得られざるはなし聖なる十字架の道に從ひ且日々己に克ことの外に生命と眞正なる心の平安に達するの道決してあらざるなり汝何所に往き又如何なるものを探むるとも聖なる十字架の道に優りて天國に行く尚高き徑なく此世を渡るに安全なる路あることなし

假令汝の希望と決斷に從ひて萬事を所理するとも常に汝の欲するものと欲せざるものとを問はず必らず多少の憂苦に堪へざるを得ず然らば則汝常に十字架に遭遇すべし是汝あるひは身躰の痛苦を覺ゆ或は靈魂の艱苦を感ずべければなり汝時として神に棄られ又時として隣人の爲に煩はされ加之往々自ら己を懶しとすることあらん此時に當て如何なる治策と慰藉を用ゆるとも其痛苦を救濟ひ或は之を輕減すること能はず唯神の聖旨の滿るまでは必ず之を忍ばざるべからず蓋し神の聖意は汝をして慰藉なくして勉めて患難に堪へ全然己を神に歸服せしめ且患難によりて更に謙遜の心を增さしめんとするにあり自ら基

督の如く惱みしものは他人に超りて基督の患難を感
すること深からん
是故に十字架は各所に準備て常に汝を待り汝那邊に
奔るとも安んぞ之を逃るゝことを得んや何となれば
汝那邊に往くも其己に從ひ又常に其己に逢ふべけれ
ばなり上下内外凡て汝の向ふ所十字架に逢はざる所
なかるべし汝若し心の平安を有し永遠の冠冕を享け
んと欲せば何處に於ても必らず堅忍の心を缺く可か
らざるなり

(二)汝もし快然十字架を負はゞ十字架又汝を負ひ汝をし
て希望の極所に到らしめん其極所とは則ち患苦の竭
る所なれども現世に於てはこれあらざるべし然れど
も汝若し快らずして之を負はゞ汝の爲に重荷とな
り其駄量を增蓰すべしと雖も汝必らず之を荷はざる
べからず假令一個の十字架を擲棄するとも又必らず
別個の十字架に逢はん恐らくは是尙重かるべし
汝は各人の避け得ざりしものを敢て遁れんと思ふや
此世において聖徒の中誰か十字架と患難に遭遇せざ

りしや我等の主耶蘇基督と雖も此世に在せし間は一刻の間も脊て其患難の爲に懊惱せざりしことなし曰く「基督は必らず患難を受け死より甦りて其榮光に入るべきなり」と然るに汝は如何なれば此大道なる聖き十字架の道を棄て敢て他の徑路を索むるや基督の生涯は十字架を負ふと殉教者の道なりしに汝ら自ら安息と喜悅を需むるや難若し患難を求ずして他事を求むるはこれ實に過るなり蓋し此朽べき生涯は不幸を以て充され四面皆十字架を以て印せらるればな

り而して其靈の上達するに從ひ彌重き十字架に遭ふことあるべし何となれば神に遠かるを悲む心は神を愛する念と共に增加すればなり

（三）斯の如き人は假令種々の艱難を受るとも全く安慰に乏しきものにあらず何となれば其十字架を忍ぶことによりて莫大なる福利の增殖するを認るが故なり是人欣然十字架を擔る中には患難の重荷は皆翻て神より出る安慰を確信することに變じ且患難益肉躰を減殺せば心裡に受くる所の神恩は倍靈を强むべ

リ哥後四
〇十六

メ哥前九
〇廿七

し又基督の十字架に倣ふことを愛するより時として
は患難と災厄を希望するの念を以て安慰となし遂に
悲哀と患難の常に身に在るも厭はざるに至るべし蓋
し神の爲に益多く不幸を受れば倍深く神に喜ば
るべしと信ずればなり
夫孱弱なる肉躰をして能く斯る事に堪へしむるは決
して人の力にあらずして基督の恩惠なり是に因て自
ら常に嫌避することをも靈の勇氣によりて之を迎へ
愛するに至るなり十字架を擔ひ之を愛し身躰を責て

ル弗六〇
十六

之を制服し諸ての榮譽を避け欣然として凌辱に耐へ
自ら輕んじ又人に輕んぜらるゝことを願ひ凡ての災
禍と損害を忍び又決して此世の榮達を願はざること
は抑人の天性にあらざるなり汝若し己を恃とした
らんには決して是等の事を成し遂ること能はずと雖
も若し主を賴とせば堅忍は天なり與へられて世と肉
とは汝の命令に從ふものとならん又汝信仰を以て武
器となしイエスの十字架の記章を帶る時は汝の敵な
る惡魔をも恐れざるべし

此故に汝勉て基督の爲に善良忠實の臣となり愛に
因て汝の爲に十字架に掛り給ひし主の十字架を勇し
く擔ひ自ら備をなして此悲慘なる世に於て多くの災
禍と種々なる憂苦に堪べしそは汝那邊に在るも此世
は悲慘にして又何所に隱るゝも必らず憂苦に逢ふべ
ければなり是則ち人たるものゝ當然にして只自ら忍
ぶことの外決して患難と憂愁を遁るゝの妙策あるこ
となし汝若し主の友となり主と事を與にせんと欲せ
ば宜しく赤誠の愛情を以て主の杯を飲むべし而して

チ 太廿〇 廿三

ワ 羅八〇 十八

カ 羅五〇 三

慰藉のことは神に一任して其最も好み玉ふ如くなさ
しめ汝は自ら患難をうけ之を以て最大なる慰藉と思
ふべし何となれば今世の苦難は汝獨り悉く之を受
ることを得るも未來の榮光に比ぶべきにあらざれば
なり

（四）汝若し基督の爲に患難を以て快樂となし又之を嗜む
の境遇に達する時は以て幸福となすべし是乃ち汝地
上に樂園を得たるなり然れども汝未だ患難を以て不
幸となし之を避んと欲する間は常に心安らかならず

して艱苦を遁んとするの冀望は至る所汝に隨はん汝もし汝の當に爲すべきこと則ち苦惱を忍び死に逢ふことに心を注むれば是れ直に汝の福なり又平和を得るの道なり

ヨ哥後十二〇二

縱令パウロと共に第三の天に擧げらるゝことあるとも尚是を以て全く災禍を免れたりと安心すべからず

ダ徒九〇十六

耶蘇曰く彼は我名の爲に如何ばかりの苦難を受るかを我之を彼に示さんと此故に汝若し耶蘇を愛し絶ゑず彼に事んと思はゞ宜しく苦難に堪るべきなり願くは

レ徒五〇四一

汝耶蘇の名の爲に多少の苦難を受るに足るものとならんことを若し耶蘇の名の爲に苦難を受れば汝を待てる榮光は如何ばかりか大ならん神の諸聖徒も如何ばかりか懌ばん汝の隣人も教化せらるゝこと如何ばかりか大ならん蓋喜て艱苦を受るものは稀なれども人皆忍耐を稱揚すればなり汝は欣然基督の爲に些少の患苦を嘗むることは最も當然なるべし何となれば此世の爲に尚悲慘なる苦を受るもの蓋し尠からざればなり

ソ詩四四
○廿二
哥后四○
十一
ッ羅十四
○七、八、

（五）汝は日々主の爲に死する生活を送るべきことを確知すべし人愈己に對して死する時は彌神に對して生活るものとならん人若し自ら屈して基督の爲に患苦を忍ばざれば決して天の事物を會得すること能はざるなり神の最も喜び給ふことゝ此世に於て汝の爲に最も佳善なることは基督の爲に快然患苦を嘗ることなり而して汝もし採擇することを得ば夥多の慰藉に浴するよりも寧ろ基督の爲に災害を蒙ることを望むべし何となれば斯く爲せば汝基督に近似し又凡て

の聖徒に倣ふことを得ん蓋し吾人の功勞と靈の進歩とは多くの甘美と安慰を領るにあらずして反て大なる災害と艱難を忍ぶことに因ばなり

若し人をして救に入らしむるの道辛酸を嘗ることよりも尚善美多福なるもの實に世にあらんには基督は必ちず言語と範例を以て之を明示せしならん然るに己に從ひし子弟等及び從はんと欲ひし衆人に惟十字架を擔ふべきことを明に訓戒して云ひ給へり曰く

「若し我に從はんと欲ふ者は己を棄てその十字架を

子太十六
○廿四

ナ徒十四
○廿二

負て我に從へ」と此故にわれらは普く聖經を通讀し百事を精攻して後此言を以て終局の結論と爲すべし曰く「吾等は多くの思難を經て神の國に至らざるべからず」と

世範卷之二終

○二
世範三五

イ詩八五
○八
ロ毋前三
○九
ハ伯四○
十二

世範卷之三

心裡に受る慰藉の事

第一章　忠誠なる魂に基督の密語し給ふ事

(一)「我は主なる神の語り玉ふことを聞ん」と夫其心裡に主の語り玉ふことを聞ん」と夫其心裡に魂は幸福なり欣然神の密語を聞て此世の多くの耳語を入れざる耳は幸福なり心中に訓を垂れ玉ふ眞理の聲のみを聞て外部に響く聲音を聞かざる耳は幸福

ホ詩三五〇三

ニ路十〇四一

なり外物を見ずして心靈のことを凝視する目は幸福也深く心靈の事物を探り靈界の奥義を領る爲に日々の習練によりて益己を整ふることを努むる者は幸福也又神の爲に用ふる時機を求め凡て世の煩累を抛棄する者は幸福なり

（二）我魂よ汝是等のことを深く省て主なる神の汝の衷に語り玉ふことを聞ん爲に宜く汝の情慾の戸を鎖すべし

汝の愛する者斯く曰り我は汝の拯救なり平和なり生命なり我と共に居るを務よさらば汝平和を得ん」凡て浮薄なる者を棄て永遠のものを求むべし夫浮薄なるものは皆陥阱にあらずして何ぞや汝若し創造者に棄てられたらんには總ての受造物何ぞ汝を益せんや

此故に萬物を去て努て汝の創造者を悦ばしめ且忠實を以て彼に事ふべしこれ汝が眞正の福域に達することを得ん爲なり

ニ路十一〇八

正六〇

北四〇

日本書紀十〇三

第二章　眞理聲を出さずして心の中に語る事

イ 母前三十
ロ 詩百十九
ハ 詩七八百廿五
ニ 申三二
ホ 一二

（一）「僕聞く主よ語り玉へ」我は汝の僕なり我に明哲を賦へて汝の證詞を知しめ玉へ我心を汝の日の聖言に傾かしめ汝の聖言を露の如く降らしめ玉へ

昔時イスラエルの子孫はモーセに乞て云へり汝我等に語れ我等聞ん但神の我等に語り玉ふことなからしめよ恐くは我等死せんと然れども主よ我は然らじ我は然らじ我は寧ろ預言者サムエルと共に遜り且切願して曰ふ僕聞く主語り玉へと

（二）主なる神よモーセと預言者をして我に語らしめ玉はず惟主のみ語り玉へ主よ汝は諸ての預言者をして靈に感せしめ又之を照し玉ふものなり蓋し汝獨り彼等に倚らずして普く我を訓へ玉ふも彼等は汝に倚らずんば毫も益する所なければなり

然り彼等は言語を發し得れども靈を授ること能はず其言ふ所最も麗はしと雖も汝若し默し玉ふ時は人心を熱脹すること能はざるなり彼等は文字を敎ふされど知覺を啓發するものは汝なり彼等は奥義を發吐す

路廿四
ヘ 〇四五

ト哥前三〇六

されども秘蘊の教義を解くものは汝なり彼等は汝の訓誡を宣ぶされども我等を扶けて之を全ふせしむるものは汝なり彼等は道途を示すされど之に歩むの力を假すものは汝なり彼等の爲し得ることは只外面の事而己然れども汝は心を訓へ之を照らし玉ふ彼等は外より水灌ぐされども汝は豐沃を與へたまふ彼等は言語を以て號叫すされども汝は聰者に明哲を與へ給ふなり

一此故にモーセをして我等に語らしめ玉はず只永遠の

十三〇十一 四

チ約六〇六八

六〇

眞理にして主なる神我に語り玉へ我もし唯外より警めらるゝのみにて衷心熱腹を受ることなくんば我功果なくして死すべく又聞て行はず知りて愛せず信じて守らざる語は遂に我罪科となるべし是故に主よ語り玉へ汝の僕聞ん汝は永生の言をもち玉へり願くは我に語りて我魂を安慰め我生涯の言行を矯正し而して永遠涯りなき汝の讃美と榮光と尊榮を顯はし玉へ

第三章　人多くは神の聖語を重せずといへ

イ約六〇六三

ロ詩九四〇十二、十三

ハ來一〇

（一）子よ我語を聽け是れ甘美にして此世の學者賢人の凡ての智識に優りたるものなり我語は靈なり生命なり又人の才智を以て測るべきものにあらず此語は空しき喝采を博する爲めに出だすべきものにあらず但謙聽し實に謙遜と熱愛の情を以て領け入るべきものなり

我言しことあり主よ汝の懲らしめ玉ふ人汝の法を敎へらるゝ人は福なるかな汝かゝる人を禍の日より遁れしめ又地の上に孤寂たることなからしめたまはん

（二）主曰く我は太初より預言者を敎へ今も尙絶へず萬民に語るに人多くは我聲をきくに聾ぢ而して其心頑固なり概ね人は神の語を聞くよりも世の語を聞くを喜び神の聖意に遵ふよりも自己の肉慾に就くこと速なり

世の約する所は浮薄卑猥のことなるに人は爭て之に接近し我契約する所は最高無究の事なれども人心は尙淡冷痴鈍なり孰か世と其王者に仕ふる如き謹愼を

二四 二三

以て萬事に於て能く我に服事するものゼシドンよ恥を知れと是れ海の語なり汝若し其故を知らんを欲せば我説く所を聞け夫緇毫の利を得ん爲には長途の遠征を辭せざるものあれども永生を得ん爲には殆ど一投足の勞さへ辭らざるもの多く或は最も輕微なる酬をも求め一片の黄白の爲に往々恥べき競爭をなし或は虚事空望の爲にさへ日夜の勞苦を厭はざるものこれあり然るに歎ずべき哉彼等は不易の利と無量の酬と最高の尊榮及無究の光榮の爲には最微の勤勞をも

一四 二〇

二四八 一八

ホ約十九 十 ヘ來十一 ○九 ○六 太二四○ 太五○六 十三

(二)容り故に懶惰不平の僕恥よ彼等が滅亡に迫れるは汝が生命に迫れるよりも近く其虚榮を慶ぶは汝が眞理を喜ぶよりも更に深きことを彼等は實に時として其望む所を失へども我契約は何人にも違ふことなく又我に任すものをして空しく去らしむることなし我約したることは必らず與へ我云ひしことは必らず就し遂げん人只終局に至るまで忠實に我愛に止るべし我は凡ての善人に酬ゆるもの又總て我に盡せるものを厚く嘉る者なり

ヨ正六〇六　ヨ箴十一

ト路十九〇四四〇　ヨ箴十一

チ約十八〇四八

汝の心に我言を銘し怠らず之を默考せよこれ誘惑の時甚だ必要なるが故なり汝の誦んじて解せざる所は我眷顧の時之を悟るべし我は常に二個の方法を以て我撰民を眷顧す則ち誘惑と慰藉の二なり我は又日々に二樣の學課を教ゆ一は彼等の罪を譴め一は之を戒諭して其諸德を增進せしむるなり

我語を得て之を藐如する者には最終の日之を審斷するものあり

（三）敬虔の心を願ふ禱

リ創十八〇廿七　ヨ前十八〇十八至廿三

ヌ伯四〇二　ル提前六〇十七

チ耶廿三〇廿四　詩二十五〇六

主なる我神よ主は我爲に全福なり我何人なれば敢て主に語ることを得んや我は則ち最賤最劣の僕最も卑しき蟲自ら云ひ得ざる程の下賤なる者なり

主よ我は數ふるに足らず且貧賤にして力なきことを憶ひ玉へ主のみ善なり義なり且聖なり主は總てのことを爲し得凡ての物を饒に與へ萬物に盈ち玉ふ只罪人のみ空しき樣に棄て玉へり願くは主の憐恤を思ひ起し恩惠を以て我心に充しめ玉へ蓋し主は其聖工の徒にして益なきを好み玉はざればなり主若し憐恤

ヲ詩六九
〇十七
ヨ詩百四
三〇六
タ詩百四
三〇十四

と恩惠を以て我を強め玉はざれば我如何で此苦しき生命に堪ることを得ん

主の顔を我に背けず我を眷顧することを延さず主の慰藉を取り去り玉ふこと勿れ恐らくは我魂主の前に涸き衰へたる地の如くならん主よ我に聖旨を行ふことを教へ謙遜にして正しく主の前に世を過すことを教へ玉へ蓋し主は我智惠にして實に我を知り世の造られざる前又我此世に産れざる前より我を知り玉へばなり

イ王上二
〇四
ロ智一〇
一

ハ約八〇
三二、三
六

第四章　誠實と謙遜を以て神の前に世を渡る事

(一)イ我子よ眞實を以て我前に歩み純直の心を以て常に我に求むべし誠實を以て我前に歩む者は災禍より護られ眞理は彼を誑惑と姦者の讒謗より救ひ出さん而して眞理もし汝に自由を與ふる時は汝實に自由を得人の空しき語を意とせざるべし

主よ汝は實事なり主の語の如く我にあれかし願くは主の眞理我を教へ衛り終りまで康らかに我を保ち

又總ての邪なる情慾と濫なる愛より我を濟はんことを然らば主と共に歩むに我心大に自由ならん

(二)眞理曰く汝必らず正しきことゝ我心に合ふことを以て汝に教へん

汝の罪を反省して大に自憤悔恨の念を興し縱令多少の善工ありといへども決して自ら尊しとなすこと勿れ

汝は實に罪人にして數多の情慾の下に伏し之に束縛せらるゝものなり汝一個の勢力にては常に空虛に趨

りて挫折し易く散亂し易きものなり汝は誇るべき所なく自ら賤むべきことと多數なり蓋汝は自考ふるよりも尚怯懦なるが故なり

此故に何事をなすとも決して之を重大なるものと思ふ勿れ惟永遠に關することの外は皆何事も巨太のものとし貴重とし珍奇とし高尚とし又實に歡賞熱望するに足とすること勿れ萬物よりも永遠の眞理を悅びとなし唯己の極めて薄德なることのみ常に憾となすべし汝の罪惡不善を以て最も恐怖厭嫌すべきものと

○十二　箴言四

せよ是等は此世の物の如何なる損失よりも更に深く憂ふべきものなり

或は誠實の心を以て我前に歩まず好奇驕慢の心より自己と其救拯を忘れて我秘藏を覗ひ神の高遠なることを曉らんと欲するものなり然れども我往々之を聽かざるが故に其驕慢好奇によりて大なる誘惑と罪科に墮落せり神の審判を畏れ全能者の義憤を怖ぐべし又最高者の聖王を可非せず怠らず自己の罪戻を索て如何なる大罪を犯し又如何なる善事を怠りたるかを

○ホ　箴言二九　十三

○ヘ　西十二

顧ふべし

或は其信仰を書籍繪畫若くば外部の記徽形象等に委ねる或は我を其心に置ずして其口舌に置くものなり

或は之に反して其才智は照され其愛情は淨くせられて常に永遠のことを慕ひ現世の事を聞くを好まず悵然として稟性の需要に應ずるものあり是等は眞理の靈其心に語り給ふことを覺るものなり何となれば眞理の靈は俗事を輕じて心靈の事を愛し世を捐て終日終夜天國を渴望すべきことを教へ玉ふものなればな

イ哥后一〇三

り

第五章　神の慈愛の不思議なる効果を生ずる事

(一)我主耶蘇基督の父なる在天の父よ賤しき我を憶ひ玉ふことを頌へ奉る諸の慈悲の父凡ての安慰を賜ふの神よ凡て汝の安慰を受るに足らざる我に時々之を降して强め玉ふことを感謝す我は世々常に父を獨子及慰主なる聖靈と共に頌へ尊み奉る我魂を愛する主なる聖き神よ我心に臨み玉ふ時は我全心大に之

ロ詩三〇三　ハ同五九〇十六

を喜ん主は我榮光我心の慶喜なり又憂の日に我望と我避所となり玉ふ

然れども我愛は尙薄く我德未だ至らざるが故に主の力と安慰を與へられんことを要す此故に願くは屢我に來り聖き懲戒を以て我を訓へ又邪慾より我を濟ひ凡て正しからざる愛情より我心を淸め玉へ是れ我心痊され又完く淨まりて愛を施し難を冒し忍耐を固くするを得んが爲なり

(二)愛は大德なり否巨犬の善事なり其力によりて凡て重

〇十六
ヘ同正六
三
ロ伝三〇

きものは輕くなり險難なるもの皆化して坦砥となるなり蓋し愛は重荷を負へども重量をおぼへず諸の苦味を變じて甘美とならしむればなり尊き耶蘇の愛は人を厲まして大業を遂げしめ常に完全なることを望ましむ愛は卓然として高きに處り卑猥なるものゝ爲に控留せらるゝことを好まず愛は其心の目をして明澄曇りなからしめ又一時の富榮に惑はされ若くば災禍に勝るゝことなからんが爲に凡ての俗慾を脱して自由ならんことを好めり

天地の間何物か能く愛に優て甘美、剛勇、高尚、濶大、爽快、充盈、善良なるものあらんや蓋し愛は神より産れ其止る所は決して受造物の中にあらずして唯神にあればなり愛を懷くものは翔り逸し慶び又自由にして抑へらるゝことなし彼は萬物を與へ又萬物を占有すこれ其止まる所は萬物を超て凡ての善事善物の湧出する最高者にあればなり彼は賜を顧ず萬寶を捨て之を賜ふ者に向ふ

愛は屢〻分設を辨せず熱烈にして分設を超ゆ愛は重

馱を感せず困難を意とせず其力に過ぎたることをなさんとし險難の故を以て辭避することなし何となれば萬事制せらるゝ所なく又之を爲し遂ぐべしと思へばなり是故に百事を企て百業を成就して偉功を奏すれども愛なき者は落膽絶倒するなり愛は警醒して眠るとも昏瞑せず疲るゝとも倦偃せず迫らるゝとも究せず驚かさるゝとも狼狽することなし烈火煌炬の如くに歩一歩を進め泰然として百難を脱出す人若し愛をもてば其叫聲の何たるを知るべし熱愛の魂神の

聖耳を貫く聲を發して曰く「我神よ我愛する者よ主は全く我ものにして我も亦主のものなり」と

願くは我愛を擴め我心の味官をして愛をもつことを及び愛の中に鎔解され愛に浴することの如何ばかり快美なるかを味はしめ玉へ又我をして異常なる熱心と景仰を以て自己に凌駕し愛の占用する所とならしめ愛の謳を歌ふて天に在す我愛する王に隨はしめ我魂愛によりて喜び力の限り主を讃美稱へさせ玉へ

願くは自らを愛するよりも尚主を愛し唯主の爲にの

み自己を愛し又主より發輝する愛を法律の命ずる如く凡て眞正に主を愛する所のものを主に在て愛することを得させ玉へ

愛は活潑、誠實、篤行、爽快、温和なり又勇壯、堅忍、忠實、機敏、寛容、剛毅にして嘗て自己の利を求ることなし何となれば人若し如何なる場合にても自己の利を謀る時は是愛より墮落したるなり

愛は謹慎謙遜にして且方正なり愛は柔弱輕匆ならず又浮華の爲に搖かされず樽節潔白確固安靜にして五

感の慾を慎めり

愛は己を輕んじ長上に順服し虔信感謝を以て神に向ひ甘美なる休養を降し玉はざる時と雖も常に神に信托す何となれば愛に居るものにして悲憂なきもの嘗てこれあらざればなり百難を忍び又其愛するもの、意に伏順せざれば未だ愛あるものと謂ふべからざるなり愛ある者は其愛する者の爲には凡て難澁不滿のことをも甘受し不幸に遭遇するとも決して之を棄べからざるなり

第六章　眞實の愛を證徴する事

(一)我子よ汝の愛未だ堅固明智ならず「主よ其故いかん」主曰く汝は鎖細なる困難の爲に其企圖を捨てゝ太だ切に慰を求むるが故なり愛の堅きものは毅然として誘惑に堪へ讐敵の奸策を信ずることなし富榮の時に我の悅となり又禍の時にもわれ彼の厭ふ所とならず愛の明智なる者は其愛する者の贈物を顧ず寧ろ與ふる者の愛を顧るなり彼は贈物の眞價よりも之に與ふる好意を貴み凡ての贈物に勝りて其愛する者を戴

くなり高尚なる愛ある者は心を贈物に止めず却て凡ての贈物に勝りて我を慕ふなり

此故に汝時として其欲ふごとくに我とわが聖徒の爲に深く感ずることなしと雖もこれ全く損失なるにあらず往々汝の感ずる善美なる愛情はこれ當時の恩寵の結果にして又天國の前兆とも云ふべきものなれどもこれ來往常なきものなれば深く賴とすべきにあらず之に反して汝の心意に生ずる凶惡なる希望に抗抵し惡魔の勸誘を排斥するはこれ即ち德義の顯著なる

徴候にして大なる報酬を受べきものなり
此故に何事に就ても汝の心意に注集する怪しき思想に煩はさるゝことなく神に對する方正なる志望と勇氣とを以て汝の目的を守るべし又時として俄に高玄の域に登り又直に依然たる虚榮の心に復歸することあるも是決して蠱幻の致す所にあらず何となれば是等は汝が止を得ず受るものにして自ら行ふ所にあらず汝是等に苦しめられ又是等と鬪爭する間は酬を受ることにて決して損失にあらざればなり

○十四（十八）
○三（廿七）
○一（廿八）
○十一（廿二）
○廿三（廿六）

汝知るべし年經たる仇敵は術を盡して汝の善望を妨げ凡ての修德を支へ殊に汝の神の聖徒を尊重し我苦死を崇祀し罪惡を痛悔し心を警衛し德義を增進せんとする堅志より汝を碍んと欲し多くの邪念を勸めて倦厭恐怖の念を予へ汝の祈禱讀經をするを制止せんことを而して汝が心を畀ふして懺悔することは其憎む所なり若し其力能く及ばゝ汝をして聖餐を受ることをも廢せしめんとす
彼若し詐欺の網を張て汝を捕んとするとも彼に信托

ヘ太十六
○廿三

し彼を意とする勿れ彼若し邪惡不潔の念を勸むる時は之を詰責して曰く汝不潔なる靈よ退け惡漢よ恥べし我耳にかゝる事を入るゝ汝は最も汚穢なるものなり我を離れ去れ汝は奸惡なる誘惑者なり我汝に關る所なし耶蘇は强き勇士の如く我と共に在し玉へば汝敗挫すべし我は汝に從ふよりも寧ろ萬苦を嘗て死に就ん惡魔よ沈默せよ縱令我に多難を釀すとも再び汝に聞かざるべし主は我光我救なり我誰をか畏ん萬軍我に抗ふとも我心之を怖れじこれ主は我を助け我を

ト耶二十
○十一

チ詩廿七
○一
ヌ詩廿七
○三
ル同十九
○十四

ナ提后二
○三

贖ひ玉ふものなればなり

(二)汝壯士の如く戰ふべし時として怯懦の爲に倒るゝとも復勇氣を鼓して更に饒なる我恩寵に信任し汝の虛しき喜悅と傲慢を深く愼むべし人多くは是が爲に誤り往々殆んど濟ふべからざるの昏朦に陷るなり斯の如く愚にも自ら恃みて顚倒せる驕者を鑑として常に謙遜を守るべきなり

第七章　謙遜を以て主の恩惠を秘藏する事

(一)我子よ主より賜はる熟愛の恩惠を秘して自ら高きに

一揚らず之に就て多辨せず深く之を論せず反て自ら卑しめ且之を受るに足らざる者に賜はりたる物の如く之を畏るゝは汝の爲に有益安全なり

聖愛の熱は確く恃とする勿れ恐らくは其熱速に變更して冷却し易からん汝恩惠に浴したる時には宜しく之を受ざりし時如何ばかり悲慘究乏なりしかを想ふ

一汝の靈性の進歩は唯安慰の恩寵を蒙りたる時にのみあるにあらずして反て謙遜克己忍耐を以て其剝奪に

堪へ又其時に當て祈禱を忽諸にせず其他の常務を毫も怠らざるに在るなり此時に當ては寧ろ汝の能力と智識を盡して欣然汝の責任を完ふし假令汝の心意に乾燥憂悶の感あるとも決して自ら忽諸にすること勿れ事ふし成効せざる時は直に忍耐を失ひ若くは懶惰に流るゝもの多し蓋し人の途は己の力にあらず與ふるも慰むるも惟神にあり神は其人と時と量を定めて聖意の儘に與へて之を過し玉はざるなり

二輕躁にして過度に熱愛の恩惠を願望し爲に顚覆せる

廿三 ○廿七十

ロ 箴十四 ○十三 阿四

ハ 詩九一 ○四

ものあり此己の懦きことを測らずして猥りに其力の及はざることを企て其理性の斷定に從はずして却て其心の希望に從ひ神の聖旨に適はざる高遠なることを僭望したるが爲に神の恩惠の剝奪を招きたるなり自ら天上に巣を營みたるものは無慘醜褻の貶黜者に爲れたりこれ其貧賤に落し陷られたるは自己の翼によりて飛はずして我翼翅の下に信托すべきことを曉らしめんが爲なり

未だ主の途に熟せず初心のものは愼沈なる人の諫論

二羅十一 ○廿五

に服ふて自ら治めざれば欺れ滅され易からん彼等もし經歷ある人に信托せずして自己の意見に隨ひ肯て己の意を挽回せざれば其末終は危かるべし然れども自ら智惠ありとなすものゝ遜りて他人の言に從ふは稀なり謙遜の心に少量の才智を兼存すゝは博學の巨寶を有して虛しき自負の心あるよりも可なり又汝を

して倨傲に流れしむるものゝ多きよりも反て少なきを宜とす

(三)舊時の貧乏きを忘れ主の予へ玉ひし恩惠を失はんこ

とを恐るゝ敬畏心を棄て全然喜樂に耽るは決して謹慎なる行爲と云ふべからず又之と同じく災厄若くは艱難の時に於て絶望の念に屈服し我に賴りたのむの心を減少するものも亦勇氣ある智者と云ふべからず平安の時に於て過度に安全ならんことを欲する者は屢〻紛亂の時に甚しく落膽し且恐怖の念に盈るものなり汝若し常に謙遜と節を以て自ら保ち全然汝の靈を制御するの才あらば危難罪戾に陷ること少かるべし

茲に戒論あり曰く熟愛の光焰汝の靈に燃ゆる時其光明若し汝を去らば汝の身如何ならんかを熟察すべし若し其光明去るとあらば是則ち我榮光の爲又汝を警戒する爲に一時我沒收したるものにして其光明復汝に歸ることあるを懷ふべしと斯る試練は汝の欲する如くに事物常に榮るよりも反て益多きこと屢なり蓋る人の尊敬を蒙るべきは其受る所の默示と安慰の多きにあらず聖經に該博若くは其地位の高きによるにあらずして却て眞正なる謙遜の基として聖き愛

イ創十八〇二七

に充ち常に專一忠誠に神の榮譽を求め自ら無力なるを覺り實に獨り己を賤しむのみならず人に尊まるゝよりも反て其藐辱輕侮を受ることを悅ぶに因るものなり

第八章　神の前に己を卑下する事

（一）我は塵と灰なれば敢て我主に曰んや

若し自ら灰塵よりも優れりと思はゝ看よ主は我に對抗し我罪は實證となりて我之に抗辨することを得ず然れども自ら卑くして虛しきものと爲し凡て自尊の

ロ詩七三〇二二

念を離れて我本態なる塵に下れば主の恩寵我に加はり主の光我に近付ん而して假令些かなる自尊の念と雖も悉く我虛無の谿に埋りて永遠に亡ぶべし

主は其所に於て我實際を現はし我は如何なる者にして前に如何なる者なりしか又何所より來りしものなるかを示し給はん蓋我は虛無にして之を知らざれば

なり我若し孤獨ならば看よ我は完く虛無虛懦となると雖ども主もし俄然我に向ひ給はゝ我は忽ち勇勁となりて新鮮なる喜悅に充つ我は自己の重量のために

○詩二十三

○約十二
○廿五

常に落下するものなれども忽ち高きに揚られ而して主の慈愛なる懷に抱かるゝは實にこれ大なる不可思議なり

豐に我許多の缺乏を救護し又我危急を防衛し實に算へ難き禍害より我を摘拔し玉ふ原因はこれ主の愛なり我誤て自らを愛せしにより己を喪ひたれども主をのみ要め專ら主を愛せしにおりて主と我とを得たり又其愛によりて更に低く己を虛しきに下せり何となれば最も愛しむ主は諸ての功勞及び凡て我願望す

十六
○詩一〇
十
○詩四〇

二路六〇
三五

る所に超て我を厚遇し玉へばなり

(二)我神よ主は讃むべき哉われは如何なる恩惠をも受くるに足ざれども主は大なる矜恤と盡ざる慈善を以て恩を忘るゝもの又主に遠く背きたるものにも恩惠を下して絶る時あることなし

願くは我等を主に向はせ感謝謙遜虔信の心を懷かゝめたまへ蓋主は我拯救我勇氣我力なればなり

第九章　萬事を神に歸すべき事

(一)我子よ汝もし實に福ならんと欲せば我を以て歸とし

三一節 六〇

イ約四〇
十
ロ約一〇
十六

最終の目的となさいるべかるず此志あらば私慾と受造物とに甚だ傾瀉し易き汝の愛情も爲に潔くなるべし蓋し汝若し如何なる物に於ても己を求ることあらば忽焉凋枯乾燥すべきが故なり

此故に汝專ら萬事を我に歸すべしこれ萬物を予へたるものは我なり又萬物は皆至善の者より流れ出るを想はい其祖源たる我に復歸せざるべからず

(二)貧福貴賤皆活たる泉より汲むが如く我より生命の水を汲む而して欣然甘じて我に事ふるものは恩に恩を

三一節 六〇

ハ哥前四
〇七

加へらるべし然れども我より外の物を以て其榮光となし若くは多少の私德を以て喜悅となさんと欲するものは眞正の慶喜を基とせず且其心も隘くして種々の支障究迫を蒙ることあらん

此故に何等の德をも己に歸することなく又之を如何なる人にも歸することなれ惟萬事を神に歸せよ人は神によらざれば有つ所なし

我は萬物を賦與へたる故に復萬物を我に歸せんことを欲す我は謝意を要むることと太だ嚴なり此眞理を以

○ヘブル書四

○ニ路十八
○十九

で虚栄を散逸す人若し天の恩惠を享て眞正の愛を得ば心に嫉妬なく猜忌なく又自愛の念も動かざるべし蓋し神の愛は萬事に克て魂の諸力を強くすればなり

汝の斷定にして正しければ汝は唯我を以て慶喜とし我を以て期望となさんこれ神の外に善良なるものなく神は萬物に超て讃ひべく又萬物に於て頌ふべきものなり

第十章　世を輕んじ神に事ふるの喜悅しき事

○ヘブル書十二

○イ詩三一
○十九

○ロ詩百〇
三

(一)主よ我今語りて默せざるべし我は高きに在す我主我王我神の聖耳に曰ん

イ主よ汝を畏るゝものゝ爲に蓄へ玉ひし恩惠は如何ばかり豐なりやさらば汝を愛するものには如何ん又全心を以て汝に事ふる者の爲に何をか爲し玉ふ汝を考察するの甘味は實に云ひ盡し難し此甘味は則ち主を愛する者に予へ給ふなり特に主の愛の甘味を我に示し給ひしことは則ち我未だあらざりし時なんぢ我を

三 ロ 詩百〇
ハ 申六〇
五

〇 十六
ト 代上廿
三

二 詩百十
六〇十二

造り汝より遠く迷ひ出し時我を伴ひ歸りて復主に事へしめ又我に主を愛すべきことを命じ玉ひたることは是なり

汝は絶えざる愛の泉源なりわれ汝に就て又何をか云はん又我耗りて滅びたる後にも尚我を憶ひ玉ふ主を如何で忘れ得んや汝は全く望外の矜恤を汝の僕に現はし又凡ての功績に超て愛顧と懇切を示し給へり

我は何を以て汝の恩寵に酬ひんや蓋し萬事を拋ち俗世を棄てゝ隱士の生活に就くことはこれ人毎に允許

ホ 士十六
〇十五

ヘ 哥前四
〇七
ト 代上廿
九〇十四
チ 申四〇
十九
リ 詩九一
〇十
來一〇十
四

し玉はざる所のことなり凡ての受造物は必らず主に服ふべきに我主に事ふる何ぞ大事ならんや我主に仕ふるは大事と思ふべきにあらずして却て我の如き卑賤薄德の者を汝の使役に入れ愛僕の一に加へ玉ふことこそ貴重く且奇異なることなれ看よ我主に事ふる爲に所有物皆主のものなるに我主に事へず主反て我に役事へ玉ふなり則ち人の爲に主の造り玉ひし天地は我に接近して日々に主の命じ玉ふことをなさゝるとなし是尚云ふに足ず主は更に天使をして人に

役へしめ給ふ然れども尙之よりも貴きは主自ら人に役へ人の爲に己を予へんと約し玉ひしことなり我は何を以てか能く是等數萬の主の恩惠に酬ひん冀くは我全生涯を以て主に服事しまた假令一日たりとも主の爲に多少の値ある役仕をなし得んことを主は實に凡ての役事凡ての榮譽及び涯りなき頌讃を受くべきものなり汝は實に我主なり我は主の賤僕なれば全力を盡して主に仕べく又讃美を爲して須臾も怠るべからざるものなりこれ我切に願ふ所又我切

一に望所なり我に足らざる所は頗くは主之を補給し給はんことを

(二)主に役へ主の爲に萬物を輕んずるはこれ大なる榮譽にして人人なる榮光なり夫れ主は甘じて最も堅き動仕に服するものには大なる恩寵を降し玉へり主を愛する爲に悉く肉慾の樂を退けたるものは聖靈の最も快美なる慰藉を得主の聖名の爲に狹き衢に入り凡ての俗念を脫したるものは心意に大なる自由を得べし

大十一
〇三十
八〇
一三

神に事ふることは快美にして樂しき哉人の眞正なる自由と聖清を得るは之に因てなり神に役仕することは聖き哉これ人をして天使と均しく神に悅ばれ惡魔の恐るゝ所となり又凡ての忠實なる者より賞讃を受るに足る者とならしむ此役事は悅ばしく且常に望ましき哉我等これが爲に最大なる至善の酬を受け又永遠に存すべき慶喜に達するなり

第十一章　心の願望を斟酌制限すべき事

(一)我子よ汝いまだ習熟せざるもの許多あり汝尙心をとめて之を學ぶべし

(二)主よ夫は如何なることぞや

汝の學ぶべきことは全く汝の願望を我意に適はせ自ら愛するものとならずして切に我意志に從ふものとなるべきことなり

汝は屢願望の爲に熱燃し奮然挺進することありと雖ども是れ我榮譽の爲に非ずして却て自己の便宜に奔ることなきやと深く考ふべし我の爲なれば假令我如何なることを定むるとも汝これに甘服すべし然れ

ども汝もし多少の利己心を挿む時は是則ち汝を支障壓伏する所のものなり是故に我に謀らずして預め定めたる期望にも深く傾くことを勿れ恐らくは汝の後悔となる迄又始は最良のものと視て切に懇望せしものも終には之を厭ふに至らん蓋意の向ふ所善良の如く見ゆれども悉く遽に從ふべきにあらず又初め不善の如く見ゆれども皆之を避くべきにあらざればなり

(二)時あり善良なる希望及び勤勞にも檢束を置くを宜しとす恐らくは勇往に過るが爲に汝の心意亂れ自制の念缺くる爲に他人の失躓を釀し或は遮斷抵抗を受けて俄かに周章顚敗することあらん然りと雖ども時に因ては猛威を用て肉の欲すると否とを顧ず勇しく汝の肉慾に抗敵し痛苦を受るとも之れを驅打して以て其肉を靈に從服はしめざる可からず而して汝の肉萬事の爲に準備をなし如何なる煩累をも吃かず質素簡畧なることを喜び寡少を以て滿足すゝを習ふて之を懲戒し之を制馭の下に抑留せざる可からず

第十二章　忍耐の念を生育し私慾と競爭ふ

（一）主なる我神よ我は知る忍耐のわが爲に甚必要なることを如何となれば人生の事多くは吾人に逆ひ又我平安のために如何に策畧るとも我生命に鬪爭患難の盡ることなければなり

我子よ汝の云へる如し然れども誘惑なく毫も抗敵を感ぜざる所の平安を求むるはわれ汝の爲に欲する所にあらず之に反して若幾多の患難に練れ或は許多の災禍に試みられたる時はこれ汝平安を得しなりと思ふべし

汝もし多難に堪へがたしと云はゝ如何ぞ來世の焔火に耐ふることを得んやもし一個の災害あらば必其輕少なるものを擇まざるべからず故に未來永遠の刑罰を免れんと欲せば神の爲に忍んで目前の殃禍に耐ふることを專ら努むべし

汝は此世の人には苦辛なく又はこれあるも最も輕微なるものなりと思ふや試に最大の快樂を享有する人に問へ　さらば汝其然らざるを見るべし然れども汝

イ路七三
○十二
同三七○
廿

或は云はん彼等は娯樂多くして萬事其心の儘なり故に其患難を深く感ずることなしと然り假令彼等は其欲する所を悉く得るとなすも其快樂は何時まで繼續すべしと思ふや看よ此世の富者は煙の如く消へ其過去りし喜悅の記念は一も遺れざらん否彼等は縱令命ある中にても苦味謙遜恐懼の念を帶び其快樂の中に憩ふことなし何となれば彼等は其快樂なりと想像するものより往々刑罰を受ればなり又彼等は擅に其快樂を求めて之に隱ひたる故に之と共に恥辱と苦

ロ詩三七
○四

味を享くること完く當然なり嗚呼是等の快樂の短く淡く猥りにして汚れたること如何ばかりぞや然るに人は酣醉昏冥して之を曉らず只此朽べき生命の賤しき歡樂の爲に無言の畜類の如くに靈魂の死を招けり

(二)是故に我子よ汝は肉慾を要めず己の意志を棄て主によりて歡べ　さらば汝の心の願ふ所を予へ給はん汝も眞正の歡喜を望み尙饒に我慰藉を受んと欲せば則ち凡ての俗事を輕んじ總ての汚樂を禁ずることによりて幸福と豐なる慰藉を得べし汝益遠く受造物の

○四
ヨハネ三十

○八
默十二
○九

凡ての慰藉より離るれば愈甘美强旺なる慰藉を我によりて得べし

然れども初め多少の悲憂と苦戰を經るにあらざれば能く是等の慰藉に達せざるべし舊き慣習の抵抗あらんされど更に宜き慣習によりて全く之に克つべし肉は吃くとも靈の勢力を以て之を制すべし老嬰汝を苦め且擾亂することあらんされど汝は祈禱を以て之を驅斥し且益ある勤勞によりて大に其來る途を杜塞ぐべし

○十三
ヨハネ二

第十三章　耶蘇キリストに倣ふて卑賤者の其上に恭順すべき事

(一)我子よ順服することを避んとする者はこれ恩寵を避くるなり己の爲に私利を需むるものは公益を失ふなり

其長上に服從することを甘ぜざるものは是その肉未だ全く己に服せずして屢跳憤怫をなすの記徵なり此故に汝もし己の肉を制馭の下に置んと欲せば速に汝の長上に服從することを習へ蓋衷なる人

イ彼前二〇十三

もし荒廢せされば外敵に克ること容易なるべければな
り汝もし聖靈と相結ぶこと密ならざれば凡てのもの
より超て汝の魂を害する兇惡なる敵は卽ち汝なり
故に汝もし血肉に克んと欲せば實に自己を輕んずる
ことと最も緊要なり汝は己を愛すること尙過度なるが
故に全然己を擧て他人の意志に托することを恐る
(三)我は虛無より萬有を創造りし最も高き全能者なり然
れども汝の爲には遜りて人に屈服せしに惟塵と虛無
なる汝は神の爲に人に服從することもこれ何を云ふ

ロ路二〇七　約十三〇十四

〇四六　巻五二〇二三

に足らんや我謙遜を以て汝の慢心を撲滅せしめんが
爲に我は凡ての人の中にも最賤最劣のものとなれり
塵ま順服することを習へ土よ泥よ自ら低くして總て
の人の足下に叩頭するを習へ又汝の情願を打破し
て己を凡ての服從に歸せしむることを學ぶべし熱烈
に自己に反對し傲慢の念をして毫も心中に生らしむ
ることなく自ら低く小にして凡ての人をして汝の上
を歩み又街の淤泥の如くに汝を蹂躪することを得せ
しむべし

○三
二箴四三
○四

十四 詩三〇
ロ 箴二〇

愚なる人よ汝謟く所あるか汚れたる罪人よ汝の屢神に逆ひ毎時地獄に入れらるべきことを爲したるを人の讓むる時何を以て之に疏へんとするか我見て汝の魂を寶とせし故に我目に汝を怒したりこれ汝をし我愛を知り常に我恩惠を謝せしめ又絶対の眞正の服從と謙遜に屬しめ而して特に汝の上に加へらるべき凌辱に甘忍せしめんが爲なり

第十四章　私德を驕らざる爲神の審判を熟考すべき事

審判を熟考すべき事

イ 伯四〇
十四

ロ 伯十五
〇十五

ハ 伯四〇
十八
ニ 彼后二
〇四
ホ 默六〇
十三

ヘ 詩七十
八〇二五
約六〇三
一
ト 路十五
〇十六

(一)主よ汝は我上に審判を雷下し慴懼戰慄を以て我すべての骨を震はしめ給へば我魂は甚しく恐怖す我は愕然として起ち自ら想へらく諸の天も汝の目には潔からざるなりと汝天使に罪ありとし彼等をも怒し給はざるに我は如何なることにか遭はん星さんへ天より隕たりされば唯塵なる我は又何をか恃まん頌ひべき功勞をなしたる者も最も深き淵に墮ち曾て天使のパンを咀ひし者も豕の食する豆莢を嗜むを見たり

是故に主よ汝もし聖手を收めたまへば聖たるものな
イ詩十六正　ロ詩十正
き汝の示導絶なば智慧も益する所なく汝の防衛止
一詩六〇三正　ハ詩六〇二十正
まば勇氣も助くる所なく汝の保護なくば節操も安然
ホ詩六〇三十正　ヘ詩六〇二十正
たらず汝の聖き警戒われ等に存せされば我謹愼も利
ト詩六〇四正　チ詩三六〇六　リ詩十正
する所なし何ぞなれば主われらを離れ給へばわれら
ヌ詩二十八　ル詩四〇　ヲ詩十正　ワ詩四〇
沈淪堙滅し主來臨し給はゝ蘇生するが故なり我等は
實に定りなきも主の爲に堅確となり温然たれども主
によりて熱烈となれり
(三)嗚、あれ尙汝如何に謙り自ら賤むべきものにあらずや
假令われに多少の良善あらしむるも如何ばかり之を
ヌ詩二十八　ル詩四〇　ヲ詩十正　ワ詩四〇
虛無となさゝるべけんや主よ我は全く虛無にして猶
虛無なることを自ら知るに當ては加何ばかり深妙な
る謙遜を以て主の測りなき審判を受ざるを得ず嗚呼
無量の重荷なるかな渡るべからざる洋なるかな此所
にて我に就て見る所は惟完く虛無なる而已
然らば榮華の伏窟安くにか在る德義の孕める毅然た
る心又安くにかある主の審判の深き淵の中總ての虛
榮は散滅して俱に盡るなり夫主は凡ての肉を如何に

リ 詩四五 ○九

見たまふや泥塊は塑匠に向ひて驕るべきや誠に其心を神に托したるものは爭でか空しき言の爲に高ぶることを得んや眞理の訓を受けて之に從ひしものは全世界を雖も驕らすこと能はず又確然其期望を神に置たるものは讃譽者の舌の爲に動かさるゝことなし何となれば讃譽者も皆虛無にして其言葉の誓と共に過去れども神の眞理は永遠に絶ゆることなければなり

○ヌ 詩百十七○二

第十五章　凡て我欲ふことに就ての感念及び言語

イ 雅四○十五

（一）我子よ汝萬事に就て斯く云ふべし「主よ此事もし聖意に適はゞ斯く爲さしめ給へ主よ此事もし主の榮譽とならば主の聖名を以て斯くなさしめ給へ主よもしこの事の宜しさを見又わが益と認め給はゞ願くは主の榮譽の爲に之を用ふることを得させ給へ然れども

もし我害となり又我魂の健康に益なきことを知り給はゞ我より此願望を悉く取去り給へ」と

縱令人の善良正義と做す所の願望と雖もこれ悉く聖

靈より發するものに非ず汝をして或事物を望ましむる所のものは是れ果して良き靈なるや又惡き靈なるや將た自己の靈の爲に斯く動かされたるやを公正に判定するは難し人多く最初は良き靈に導かれたる如く見なしも終には欺かるゝに至ることあり

是故に如何なる望にても心意に生ずる時は必らず神を畏れ且心の謙遜を以て之を祈願せざるべからず而して格別に己を空しゝ百事を我に委任して斯く曰ふべし

主は最も宜しき所を知り給ふ此を爲し彼をなすは聖旨に任じ奉る聖意に適ふ所のものを聖意に應ふ度と時とに從ひて我に予へたまへ願くは主の喜悦を增し主の榮光を顯さんが爲に主の善と見給ふごとく我に行ひ給へ主の善とし給ふ所に我を置き萬事に就て全く主の聖意の儘を我に行ひたまへ我は聖手の裡にあり如何なる方へなりとも我を相旋回せしめたまへ我は則ち主の臣僕にして萬事に備へたりこれ我ために活ずして主の爲に活きんと欲ふなり 庶くは宜しき

に適ひて餘げなく如此活んことを
神の聖意の就らんことを求る祈
（二）矜恤に富み給ふイエス主の恩寵を我に與へ俱にあり
て我と共に働き又最後に至るまで我と共に止まら
しめたまへ
我をして主の最も喜し又最も愛し給ふことを常に懷
望ましめたまへ主の聖意を我意となし我意は何時も
主の聖意に從ひ全く之に適はしめたまへ又我志望す
ると否と主の志望したまふと否と同じからしめ且我

をして他の物によらず主の志望し給ふと否とにのみ
從はしめたまへ
我をして此世の萬物に對して死せしめ主の爲に輕蔑
を受ることと此時代に知られざることを愛せしめた
まへ又萬ての望に超えて主の中に憩ひ且わが心主の
中に在て安然ならしめ給へ主は眞正なる心の平和な
り主は惟一の安息なり主を離れては萬物皆難ふして
平かならず我はこの眞正なる平和則ち主の中に眠息
せん主は惟一最高にして涯なき善なり　アーメン

八
〇四〇

第十六章　眞正なる安慰は惟神に要むべき事

イ太十六
〇二六

(一)凡て我安慰の爲に切望し若くば想像することは今世に期待せずして之を未來に要むべし何となれば我獨り此世の諸ての安慰を有し又其凡ての快樂を享け得るとも是等の永久に存せざること昭々たればなり

是故に我魂よ汝充分の安慰完然なる滋養を享るは惟貧者を慰め賤民を保護する神に在るのみ我魂よ須臾も忍んで神の聖約を待てされば汝天に於て滿足

ロ哥后四
〇十八

二十
八四三〇

なる凡ての善福を得ん

若し猥りに目前に在るものを望まば天に在て永遠なる物を望め

(二)汝は俗世の如何なる善福にも滿足ることを能はじ汝の造られたるは是等を享る爲にあらざればなり假令汝は造れたる凡ての財貨を領有するとも之が爲に幸福を得ることなし汝の全き福祉は唯萬物を創造し給ひし神によるなり而して其福祉たるや愚かにも此

ハ肆三〇
二十

世を愛するものに顯れ且讃らるゝものにあらずして
基督の忠良なる臣僕の望む所のもの又交りを天に通
じ靈に屬して心の淨き者の時ありて豫め味ふことを
得るものなり

人爲の慰藉は一として空虛淡泊ならざるなし然れど
も眞理より心に頷るものは實に福にして確實なり

(二)虔信の人は到る所に其慰主イエスを伴ひ彼に請ふ
て曰く「主イエス」よ願くは凡ての時何れの所に於て
も我と共に在まし給へ快然欣んで人爲の安慰を享け

詩百三
〇九

ざることを我慰となさしめ給へ而して若主の慰藉
缺ぐることあらば聖旨に服し又主の義しき懲戒めを
受ることを以て我最大の安慰と爲さしめ給へ蓋は主
は恒に責むることを爲し永遠に怒を懷き給はざれば
なりと

第十七章　我等の憂愁は悉く神に任すべき事

(一)我子よ我好ひまゝを汝に爲すことを容せわれは汝に
適することを知れり汝の思ふ所は人の如く諸件を判

イ太三二
○六
ロ彼前五
○七

○六
二五三

定すること、人情の勸むる所に從ふなり

(一)主よ主の云給ふことは誠なり主の我を顧み給ふことは我自ら念ふ凡ての慮りに優れり何となれば悪く其憂悶を主に托ねざる者の立脚は甚だ脆くして躓き易く仆れ易ければなり

主よ若わが意志正しく且毅くして主に向ふことを得ば願くは如何なる事にても聖旨の儘を我に行ひ給へ蓋は主の我に爲し給ふことは必らず善ならざることなければなり我闇冥の裡に居るべきこと若聖意なる

正
〇〇
千四
二三三

十
八
二〇

も主は稱讃すべき哉われ光明の中に居ること聖意なるも主は頌べき哉われを慰め給ふときも復主は讃むべき哉我患苦を受るを欲し給ふ時も常に等しく主を頌へん

(二)我子よ汝もし我と共に歩まんと欲せば斯の如き心狀を保ち難難に就くことを恰かも歡喜に入るが如く困乏に處すること充實富裕に居るが如く欣然甘心すべきなり

主よ主の允可を經て我に望むことは如何なることに

ハ伯二〇十

ニ詩二三〇四

ホ詩七七〇七

ヘ默三〇五

て主の前にては欣然之に耐へん我は主の聖手より禍福休戚甘苦の差別なく受るを喜び我に關る所のものは凡て之を感謝せん

我を衛りて罪を犯すこと勿らしめ給へさらば死をも冥府をも恐れじ斯く主は永遠に我を棄ず又生命の簿冊より我名を削り給はざれば我は如何なる患難に遭ふとも之が爲に害せらるゝことなかるべし

第十八章　基督の摸範に倣ふて此世の辛酸に耐忍ぶべき事

イ賽五三〇四

（一）我子よ我は汝を濟はん爲に天より降り汝の禍をわが身に負たりわれ之を行ひしは止を得ざるに非ず愛情によるなり是汝をして忍耐を習はしめ又懌然として此世の災禍に耐へしめんが爲なり何となれは我降世の時より十字架上に死するまで悲愁の絶しことなければなり我は甚だ此世の物に乏しく毎時我に對する多くの怨言を聞き又われは温恭を以て輕薄と讒誣を忍び恩惠の報として不義を受け奇蹟の爲に玷瀆の語を以て酬はれ教誨の代として誹謗を受たり

（二）主よ主在世の時忍耐を守りて以て特に聖父の勅命を成し遂げ給ひしにより苦しき罪人なる我も汝の聖意に遵ふて自ら堪へ忍びをなし又我魂の安寧の爲に主親ら定め給ふ期の間この枯べき命の重荷を負ふてこそ理に適へり何となれば假令この現世は煩雜なりと雖も今は汝の恩寵によりて大に有益となり又汝の聖範と聖徒等の模例によりて弱き者の爲にも快樂晴明となり丈堪へ易ければなり且昔舊法の時に比すれば更に慰藉多し其昔の時天の門封鎖し天に到る道暗

く勉めて天國を求むるもの稀なり當時心義しくして救を得べきものと雖も主の苦難と聖き死の成就するまでは天國に入ること能はざりしなり

（一）永遠なる聖國に入るべき良き正道を我と凡て忠良の民に示し給ひしこと最と深く感謝すべき哉これ主の生命は我路にして我等の受べき晃は乃ち主たればなり我等聖き忍耐を以て主の許に進む主もし我等に立ち我等を教へ給はざりしならば孰か敢て從ふの意あらん嗚呼もし主の最も遠き模範を考察せざりしなら

ば躊躇脫離せしもの若干ぞや看よ我己に主の教理と奇蹟を聞くこと多しと雖も尙微溫きなり若主に從ひ得る大光を得ざりしならば我等果して如何になりしならん乎

イ來十二
〇四
ロ來十一
〇三七六

第十九章　禍害を忍ぶべき事幷に眞正なる

忍耐の例證を論ず

(一)我子よ汝の云るは何ごとぞや汝われ及び他の聖徒の患苦を諒察して其不平を止むべし汝未だ抵抗して流血するに至らず彼の多くの患難を受け强き誘惑に遭ひ重き殃厄と種々の試と修練を受たるものに較れば汝の煩ふ所は實に僅少なり故に須らく他人の重き報告を想起すべしこれ汝其甚だ小なる困難に堪へ易かちんが爲なり而して是等の困難若し甚だ小ならずと見ゆる時は宜しく愼むべしこれ恐らくは汝の忍耐なきに基くことならん假令患難は大なるも小なるも專ら耐忍ぶことを務むべし汝更に準備して患難に當らば其爲す所從て智く汝の受べき酬更に大ならん若し心を練習によりて勉めて患難に備へなば之に堪ふ

ることも亦容易ならん

汝斯く曰ふことを勿れ我某の手より是等の害を受るに堪へず又我は斯る事を忍ぶべきものにあらず何となれば彼はわれに大損害を與へ又我更に豫期せざる事を以て我を誹謗すればなり然れども別人よりも加なるの害にして我受べきものと認れば甘んじて之を受べし」と此の如き思想は愚なり、これ忍耐の德と之に冕を與ふるものゝ孰なるかを察せずして却て他人の人となりと受たる害の如何を量るなり人若し唯其

意に適したる人より其意に應ずるだけの禍を甘受するものとせばこれ眞の忍耐にあらず眞正の忍耐を爲す人は己を修練するもの長者なるか同班なるか若くは劣者か將た善且聖なる者か邪にして不德なるものかを意とすることなく其受る害は如何に多く又如何ばかり繁くして如何なる者より來るとも皆一樣に神の聖手より來るものゝ如く感謝を以て之を受て失利益となす何となれば假令何事にても只神の爲として受しことは如何ばかり微なりと雖も神は之に報い給

はざるを得ざればなり

是故に汝勝利を得んと欲せば戰の爲に常に備ふべし

ハ提后二〇三、五、

ハ鬪ふことなければ忍耐の冕を得ることなし倘し患苦を厭はゞこれ寶冠を斥くるなり若し寶冠を受んと欲せば勇戰堅忍すべし勞働せざれば決して安息に至ることなく戰はざれば勝利に達すること能はじ

(二)主よ我本性には成し難く見ゆる事をも聖恩によりて之をなすことを得させ給へ主はわが多くの患難を受得ざることと又輕微なる災厄の起るときは忽ち顚倒す

ることを知り給ふ願くは聖名の爲に患難より受る渾て の修練を我に樂しからしめ給へ蓋は主の爲に患難を受るは實にわが魂の滋養なればなり

ロ詩六六、一〇

イ詩三二、一〇五

第二十章　自己の屠弱なることを認むべき事及此世の悲慘なる事

(一)主よわれは自ら不義なるを懺悔し我軟弱なるを認んわれは屢些事の爲に愁ひ悲み勇氣を以て事をなさんと決心すれども若し一小試誘の來るに逢へば忽ち大に究迫せらる往々極めて鎖細なることより大試

誘の生ずることあり而して我自ら稍安全なりと思ひ
毫も困難を豫想せざる時動もすれば一陣の微風の爲
に殆ど完く壓倒さるゝことあり
○主よわが賤しき姿わが脆きことを看よこれ皆汝の知
二　り給ふ所なり願くはわれを恤み我を泥濘の中より救
ひ給へこれ我之れに固着せず又全く永遠に敗衂せら
れざらんが爲なり我は甚だ轉倒し易く又我情に抵抗
すること弱き爲に屢〻逡巡し又汝の目前に慚ず而し
て我完く之に服するに非ずと雖ども其間斷なき襲擊

ロ詩六九
○十四

は煩苛にして斯く日々鬪爭の中に活ること實に嫌忌
の極みなり斯る忌はしき思想は我心に注入することと
更に速にして其去ること遲緩なるを以て我孱弱なる
こと明なり
イスラエルの神よ切に誠忠なる魂を愛し給ふ天の主
よ願くは汝の僕の勞と悲愁を察し凡そ如何なることと
にても其爲す所を授け給へ天の勇氣を以て我を强め
給へこれ舊き人乃ち全く靈に服せざる汚れたる肉の
我に勝ち我を制することなからんが爲なり我此悲慘

ハ書一〇
九

ニ弗四〇
二二

なる生命を保つ間はこれに對して戰ふこと必要なるべし

（二）嗚呼禍なる哉此生命患難禍害の絶ゆる時なく至る所陷阱仇讐充滿せり蓋し一個の患難若くは試誘の去る時には又他の患誘代り來る而已ならず最初の爭鬪未だ果さゞる間に忽焉他の多くの讐敵相接して至る

斯の如く多くの辛酸を有し斯の如く多くの災害不幸に圍るゝ生命は爭で愛するに足らんや又斯多くの死

（二）
（二）
（二）

約壹二〇十六

と疫癘を生ずる所のもの何ぞ生命と稱するに足らんや然れども是れ人の愛するものにして之によつて自ら娛まんと要むるもの多し人往々此世を誹議して騙欺虛空なりと云ふと雖も容易く之に分離すること能はざるは蓋し肉の情願に左右せらるゝが爲なり或は吾人をして世を愛せしむるものあり或は之を疎んせしむるものあり肉の慾眼の慾生命の驕は吾人をして世を愛せしむ然れども適然是等に伴ふべき痛苦と慘憺とは世を忌み世を厭ふの心を生せしむ然れども不

へ伯三十
〇七六

義の快樂を慕ふの念は世に沈溺したる人の心を壓服すること誠に歎すべきなり彼は荊棘の下に伏するとを悅ぶ蓋は神の甘美なること及び道德より生ずる心の快樂を見且味ひたることなければなり

之に反して完く世を疎んじ聖き規律の下に神に對する生活を修練するものは眞實なる棄世者に約し給ひし神より出る甘美を知らざることなし又彼等は世人の過誤如何に大にして其騙るゝこと又如何ばかり多端なるかを尙昭かに見るなり

イ詩三七
〇七

ロ羅八
一九、二〇
二

第二十一章　凡ての善ものおよび凡ての恩物に超て神によりて憩ふべき事

我魂よ汝は萬物に超ゆまた萬物に於て恒に主によりて憩ふべし蓋は主は聖徒の涯りなき安息なればなり

（一）最も甘美にして愛み深きイエス　ヨ願くは我をして凡ての受造物よりも凡ての健康と麗姿よりも凡ての榮華と顯位よりも凡ての權力と威光よりも凡ての智識

二一、ヒ二一、ロ一八〇

ヨ慧敏よりも凡ての富と藝術よりも凡ての喜悅と歡
樂よりも凡ての芳名と賞贊よりも凡ての甘美と安慰
よりも凡ての望と契約よりも凡ての功勞と情願より
も爾の我に賚ひ得べき凡ての恩惠と恩賜よりも又人
の心を以て感受し得らるゝ凡ての快樂と慶賀よりも
および天使あまつかひの長總ての天軍よりも有形無
形の萬物よりも又爾にあらざる凡てのものよりも只
我神なる爾によりて安息を得させ給へ
蓋は主なるわが神よなんぢは萬物に優りて最も善し

一八、ヒ三四

六〇、ヘ一五五

主のみ最も高く主のみ最も强く主のみ最も盈滿なる
者主のみ最甘美にして最も慰藉に富み主のみ最麗し
く且愛に充ち主のみ萬物に超ゑて最も顯貴にして且
榮光ありまた凡ての善事則ち今在るもの又已に在り
しものまた未來に在るべきものと皆具に備りて主に
存すればなり此故に爾を見ず又十分に爾を受けざる
間は爾の外なる如何なるものを與へ給ふとも若くは
爾に就て我に彰はし若くは約束し給ふともこれ唯些
事にして滿足し難き所なり我心は如何なる恩惠にも

八詩五五
六〇

二詩三四
〇八

又受造物にも悉く超て爾を以て安息となさずんば實に眞正なる安息を得ることなく又全く滿足することは能はざるなり

我魂の最愛の配偶最醇なる愛者凡ての受造物の主なるイエスキリストよ　冀くは我に眞正なる自由の翼翅あらんことをさらば我飛翔して汝によりて憩安を得ん主なる神よ我何れの時か全く心意を靜めて熟察し爾のいかばかり甘美なるかを見るを得ん又何れの日か全く己を爾に献げて汝を愛する理由によりて

自己の在るを感知することなく凡その感覺と度量に超ゆる各人の知らざる法によりて唯爾をのみ感知し得べきかされど我は今屢大息し愀然として我不幸を忍べり蓋し此不幸の谿には多くの禍生じ爲に屢煩累悲哀憂鬱に陷り毎時妨擾誘惑を受く是が爲に容易く爾に達することを能はず又福なる靈魂の爲に常に備へられたる甘美の歡迎をも享ることを能はざるなり

願くはわが歎息と此地上の雜多なる窘困によりて爾

ホ 來一〇
三

の心の慰かんことを嗚呼永遠なる榮光の光輝客旅に
在る靈魂の慰主なるイエスよ汝に向ては我舌聲を
發せず爾と語るものは沈默なり我主の來る何ぞ遲々
たるや願くは主の賤しき臣隷なる我に臨み我を懌ば
しめ給はんことを願くは其聖手を延て萬憂の中より
感むべき此賤夫を救ひ出し給はんことを願くは主よ
來かたまへ主なくば我に樂しき時日なし主はわが欣
喜にして主在ざれば我食卓寂然たり我は實に不幸
なるものなれば主その聖貌の光を以てわれを養ひ我

イ 八〇
詩八六

ヘ 六〇
正 詩百一

に自由を與へ溫乎たる顏容を我に現はし給はざれば
恰も俘虜縲紲にある狀態なり人は爾を措て其好む所
を求むるも可なり惟われに於ては主の外何物も今時
に永遠に我を怡ばしむる者なし主はわが神わが希望
わが涯りなき拯救なり爾の恩寵再び我に歸り爾わが
心に語り給ふまでは我は默せじ又祈禱をも止めじ
(二)主曰く看よわれは茲に在り爾われを呼びしによりわ
れは汝に到れり爾の紅淚と爾の靈の冀望と爾の謙讓
と痛悔とは我を誘ひて爾に嚮はしめ又爾に到らしめ

たり

（三）我答へて曰ふ主よわれ爾をよび又爾の爲に萬物を担絶

（一）まるの準備をなして爾の欣喜を享けんことを願へり

乙れ爾初にわれを動かして爾を探めしめたまひたれ

ばなり是故に主よわれは爾の矜恤の饒なるによりて

此任恤を爾の僕に垂れたまひしを頌へん爾の僕は爾

の前に於て又何をか云はん只其爲し得る所は常に己

の罪科と姦惡とを忘ずして爾の眼の前に深く遜るべ

き而已何となれば天地間の凡ての奇異の中に爾の如

（詩百一九〇六五）

（詩八六〇八）

きものあらざればなり爾の工は甚だ良く爾の審判は

正直なり宇宙は爾の豫定によりて理めらる主は聖父

（二）の智惠なるが故に讃美と榮光は爾に歸すべし我口も

魂も又凡ての受造物も共に爾を讃め頌へん

第二十二章　神恩の夥多なるを忘るべからざる事

（一）主よわが心を啓き爾の律法に敏からしめわれを訓へ

て爾の聖誡を踐しめ給へわれに爾の聖意を悟らせ又

厚き敬虔の心と愼重なる熟慮を以て爾の我等にも人

〻にも賜ふ恩寵を憶はしめ給へさらば今より當然感謝を献ぐることを得ん然れどもわれは爾より領たる愛恤に對し正當なる感謝は更に爲すに足らざることを知り且我之を自白す我は爾の凡百の恩惠中の最微なるものよりも尚微にして爾の稜威の巨大なるを懐ふときは我靈ために昏冥す

(二)凡て我等の心内に在るもの及び躰外にある性に超るもの或は性によるもの皆爾の恩惠なり皆爾を頌へて吾人に凡ての善物を賦與せし仁慈惠愛良淑に富めるものとなせり

甲者の領る所多く乙者の領る所寡しといへども萬物皆爾の有にして假令最微のものたりとも爾によらずして得らるゝことなし

最も多く與へられたるものと雖も其功勞を驕り自ら昂ふして人を侮り又領ることの少なき者を輕んずべからず何となれば己に歸すること最も少くして謙遜と熱愛とを以て感謝をなす者こそ最俊最良のものなり而して自ら以て萬ての人よりも卑賤なるものと做

イ代上二九〇一四

し又最も不徳なりと自認する者こそ更に大なる賜も
のを受るに足るなり
而して領ること寡きものと雖も是が爲に心を落し或
は之を憾となし或は多量の賜を受けたるものを欽む
べからず却て其心を爾に向け爾の人に偏らず快く啻
むことなく寛大に其恩賜を降し給ふ所の仁愛を大に
讃美すべきなり
萬物爾より出づ故に萬物に於て爾を讃むべきなり
(三)
爾は各人に與ふべき所を知り給へり然れば甲の受る

ロ哥前一〇二八

所寡くして乙の領る所多き理由を判定するはこれ
吾人の爲すべき所にあらずして各人に適する所を明
かに知人たまふは爾の任なり
故に主なる神よわれは外相と人の意見にて榮華と歎
賞を爲すに足ると見ゆるものを多く有せざることを
以て大なる矜恤と思ふなり何となれば人若し自己の
貧窶と卑賤とを料度らば決して悲哀の念を懷き落膽
することなく却て大なる慰藉を得て喜を催すべきな
り神よ爾は貧しき者賤しき者此世に藐視らるゝもの

ハ詩四五〇一六
ニ前前二〇十
ホ徒五〇四一

を撰て主に屬するものとし其親近の家僕となし給へり證人は則ち使徒なり爾は彼等をして全地に君たらしめ給へり而して彼等世に在し時は謙くことなく謙遜朴直にして毫も惡意詐騙なく却て爾の聖名の爲に嘲罵さるゝことを深く悅び世の謙忌する所のものをも大なる愛情を以て懷抱したり

是故に人若し爾を愛し爾の恩愛を認識せば聖意の如く永遠より定め給ふ所に從ひて待るゝより勝るの喜なかるべし此を以て滿足安心して自ら最賤者たることを喜ぶことと他人の最高位を欲するが如くすべし假令最下の位に在るも靜和滿足なること恰も最位者に在るが如く無名無譽なる貶侮の廢人たるを懌ぶこと恰も人に勝れて尊まれ又此世に於て人よりも顯貴なるを喜ぶが如くすべし蓋は爾の聖意と其榮光を愛することは萬事を措て求むべく又彼の現に受け若くは後に受くべき所の凡ての福利よりも更に之を深き慰樂となすべきものなればなり

第二十三章　心に大なる平和を生ずる四箇

イ路十四
〇十

第二十三章　心に大なる平和を生ずる四箇の事

(一)我子よ今平和と眞正の自由との途を爾に教へん
主よ願くは爾のいひ給ふ如く爲したまへ之を聽くことは我樂なり
我子よ爾の意見を行ふより寧ろ他人の意に從ふことを望め爾その有ところ多からんよりも反て少からんことを常に好め爾又常に最下の席に就き各人に劣らんことを求め上爾神の聖意の完く爾に成し遂げられんことを常に冀禱すべし斯の如き人こそ平和と安息

〇二ノ三
正四位

〇十二
一十二

の域に入るなれ
主よ此簡短なる聖教は多くの完成を其中に銜み言短きも義深ふして果實豐かなり何となれば我もし堅く之を守るを得ば容易に擾亂さるゝことなかるべし又自ら不穩壓迫せりと感ずる度に此教理に悖りしことを知るなり然れども爾は全能にして常に我魂の上達を望み給ふ願くは其恩寵を我に增加へ我をして爾の語を完ふし又我拯救を成し竣ることを得させた

(二)如へ

（二）邪念を防ぐ祈禱

主よわが神よ我より遠り給ふことなかれ我神よ願くは己を助け給へ　何となれば雑念と大懼は起り立て我魂を惱ざんとせり　我は如何にして無事に之を脱過じ得ん　又如何にして之を粉碎するを得ん

ロ詩七一　〇十二

主曰へらくわれ汝の前に往きて地の驕傲者を平げ牢獄の門を開きて幽邃の所に隱れたる秘密を爾に示さんと

ハ賽四五　〇二、三

主よ爾の日ひ給ふ如くなし我邪念をして悉く爾の面前より逃走せしめ給へ　我期望と唯一の慰藉則ち凡て患難の時爾に逃れ爾に依托し我心の底より爾を呼び求め而して忍んで爾の慰藉を待つこと是なり

正六　ヤ詩二一

（三）心の照明を求むる祈禱

矜恤深きイエスよ願くは晴明なる心の光を以て我を照し我心に棲む凡ての闇冥を驅除し我多くの迷想を夷げまた劇烈にわれを攻むる所の誘惑を粉齏し我爲に健闘して悪獣則ち肉の情慾を減じ給へ　これ爾の權力によりて平和を得盛なる爾の讃美を爾の聖殿則ち

イ詩一〇　〇三

ハ詩四三

ニ詩百二　二〇七

ホ詩四〇

ホ可四〇
三九
二〇
二一

潔白なる心に於て奏せんが爲なり又風と颱風を掌り海に對して靜なれといひ北風に向て吹かざれと云ひ給へさらば大なる靜和あらん

ヘ詩四三
〇三

爾の光輝と眞理を發射して地上に燦かしめ給へ蓋は爾の光を受けざる間は我は只地の如く漠然形なきも

ト創一〇
二

（三）のなれはなり天より爾の恩寵を注ぎ天の清露を以て我心を浸し地上に水漑ぐために虔信の鮮流を加へ善良最美なる果實を穣らしめたまへ又罪の荷重に壓搾せらるゝ我心意を累揚し我情願をして悉く天の事

チ創二〇
五六

物を仰望せしめ給へこれ天國の快樂を我に味はしめ地上の事物を想ふことたに厭ふに至らしめん爲なり

〇十二
ロ詩十四

〇三三
ト詩十一

冀くは凡て受造物の浮薄なる慰藉より我を拔濟し給へ蓋は一の受造物として我情願に十分なる安慰と休息を與ふるものなければなり願くは解くべからざる愛の鎖紐を以て我を爾に纏ぎ給へ何となれば爾を愛するものを滿足せしむるは獨り爾のみにして爾によらずんば萬事空漠輕浮なればなり

第二十四章　他人の生命を穿鑿せざる事

（一）我子よ多くの事を穿鑿し又益なき心勞を以て自ら煩ふこと勿れ是汝に何の關係あらんや爾はわれに從へ

イ約廿一〇二三

縱令彼の人は云々なる行爲をなし又此人は云々の言語を發するとも汝に何の干與あらんや爾は他人の爲に答辯するの要なく唯自己の事のみ神に訴ふべし然るに自ら累ふは何の爲ぞや看よわれは各人を知り天下に行はるゝ萬事を洞見し又凡ての人の境遇と其思ふ所其顯ふ所および其意志の向ふ所の如何を了知す

ロ羅十四〇十二

是故に萬事みな我に委托すべし而して爾は自ら泰然靜處し騷然たるものをば其意の如く躁騷たらしむべし彼等の爲す所いふ所は何事によらず皆自ら其責に當らん彼等われを欺くこと能はざればなり

ハ彼前四〇十七

（二）高名者の樹影名望或は衆多の交誼もしくば人の親愛するを求むること勿れ何となれば是等は汝を惑はし又太だ心を闇ますものなり爾もし慎みて我來臨をまち心門を開きてわれを迎ふれば我は實に欣然として我道を語り我秘密を爾に啓はさん汝宜しく周慎み常

○十八章
○イ約十四
○七

に醒て祈禱り萬事に於て遜るべし

第二十五章　心の確固たる平和と靈の眞正なる上進を得る所以

(一)我子よわれ嘗て いへり「われ平安を汝らに遺すわれ
(二)平安を汝らに與ふわが與ふる所は世の與ふ所のごと
きにあらず」と平安は萬人の望む所なりと雖も眞正
なる平安の由て來る所以を意とするもの少し我平安
は心の謙遜柔順なる者と偕にあり爾堅く忍ぶことに
よりて其平安を得ん汝もし我に聽きわが聲に從はゞ

多くの平安を享るに足らん
主よ然らばわれ何をか爲すべき
主曰く諸般の事務に於て汝が爲す所と云ふ所を自ら
顧み而して我の外何ものをも請望することなく只わ
れを善ばすことのみに汝の全意を注ぐべし而して他
人の言行をば決して酷に審斷することなく又其任に
(一)當らざることの爲に自ら煩ふこと勿れ斯の如くせば
汝擾亂を蒙ることと殆どこれなからん
然れども決して如何なる紛亂をも感せず又如何なる

心身の艱苦をも覺ざるはこれ此の世のことにあらずして永遠なる安息の狀態に屬するものなり

（二）是故に假令毫も心に壓重を感ぜざるともこれ眞正の平安を得たるなりと思ふこと勿れ又仇敵の爲に苦むことなくとも是れ萬事安泰なりと思ふこと勿れ又萬事意のごとくなるとも是れ則ち全成なりと思ふこと勿れ假令汝は偶ま熱切の心を發し神慰の甘味を感ずると雖も決して自ら昂くすることなく又特に愛せられたるものと思ふこと勿れ何となれば眞正に道德を愛するものゝ識別せらるゝは是等の爲にあらず又人の靈魂上の進歩と全成とは是等によらざればなり

主よ然らば之を得る所以は如何

主曰く是則ち眞心を以て己を神の聖旨に委ね大事にも小事にも又現時に於ても永遠に於ても自己の利益を求めざることなり而して慶福の時にも禍殃のときにも等しき衡量を以て萬事を計り常に感謝して同一の顏容を維持すべしなんぢ勇氣あり忍耐ありて望を確くし心の安慰を失ふたるときにも更に重き禍に堪

へ得る爲に其心を備へ又自ら義として今受るところの災害もしくば此に類する大禍を受べきものにあらずとなすことなく却てわれ如何なることを定むるとも我を義として我聖名を讃美すべし然らば爾の歩む所は正且義なる平安の途なるなり又大なる悅を以て再び我顏を見るの確き望みあるべし然れども爾もし自ら輕んずるに至らば乃ち知るべし汝が此客寓の狀態にありて得る的の豐かなる平安を必らず享ることを

第二十六章　自由なる心意の秀美及び之を得るは祈による事

及び之を得るは讀書によらず

熱心なる祈禱によるこそ

(一)主よ全成なる人の務は嘗て在天の事物を熟考するを惰らずして煩憂なく多くの煩憂の間を通過することは是なり是則ち凡ての感覺に乏しきにあらざれども自由なる心意の特權によりて猥りなる愛情を以て受造物に戀着することなきが故なり

(二)慈仁に充ち給ふわが神よ願くは此世の過慮より甚

(二)しゝ我心の亂れざるよう守りたまへ又肉躰自然の需によりて快樂に惑はざるやう衛りたまへ又凡て何事によらず魂を害するものを防ぎ患難の爲に挫かれ覆へさるゝことなき樣ぞもり給へ我は世の虛榮の切望することを語らず却て人類の刑罪および一般の禍災

(一)にして爾の僕の魂を碍壓し之をして其欲ふことく屢ば聖靈の自由に入るを得せしめざる所の艱難に就て祈るなり

(三)嗚呼わが神なる主よ汝の甘美は云ひ盡し難し願くは彼の美はしき福利を目前に示し汗惡なる手段を以て我を誘ひ而して永遠の事物を愛することより我を遠ざからしむる所の肉の凡ての安慰をわれに苦からしめ給へわが神よ願くは我をして血肉に負ず世と其淡しき榮華の爲に欺かれず又惡魔と其惠悟なる詐術の爲に瘟さるゝことなからしめ給へ我に抗拒する勇氣と忍耐する力と弛まざる堅志とを與へ世の凡ての安慰に更て爾の聖靈の最も甘美なる膏油を注ぎ肉の愛に代ふるに爾の聖名を愛する愛をわが心に充た

イ箴三十〇七九

ロ提前八〇八九

しめ給へ看よ飲食衣服および其他肉躰を維持するに缺くべからざるものは熱烈なる靈の煩累なり願くは我をして斯る補養物の用を節し過度に是等を欲望して心を亂すことなからしめ給へ天性は保養すべきを以て萬物悉く抛擲すべからずといへども盈溢と單に快樂に供する者を需むるは聖律の嚴禁する所なり然らざれば肉は必ず靈に忤ふことあるべし願くは爾の聖手を以て我を訓へ理め其分限に超ゑざらしめ給へ

イ太六〇二二

ロ哥前六〇十二

第二十七章　至善を需むるに最も妨げ多き私愛の事

(一)我子よ爾萬事を得んと欲せば萬事を棄つべし而して一片の私心をも懷くべからず自己を愛するの害は此世のあらゆるものよりも深きことを知れ自己を愛するの多少に從ひ諸ての物爾に纏ふこと亦輕重あり若し汝の愛純潔にして端正なれば事物の爲に束縛せらるゝことなるべし

汝の有つべからざるものを嗜むことなく又汝を妨げ

○十二 ロ箴前六

心の自由を失はしむるものを領つこと勿れ

二二 ハ六〇

汝が持てるもの若しくは望む所のものを擧て爾の心底より全然己を我に托歸せざるは實に異しむべきことなり何故に益なき愁傷を以て自ら殺くか又何故に無要の心勞を以て自ら煩はすか爾は堅く立て我旨によれ

八 費五五 ○二 彼前五〇 七

然ちば汝は毫しも傷害を受くることなかちん

(一) 汝もし云々の物を求め又云々の處にあらんと欲し主として一身の福利快樂を貪ることあらば決して靜和なることなく又心勞を免るゝこと能はじ何となれば

十一 イ創五〇 十六 ヘ詩三〇 ○十二 ホ詩五一

一〇十三 ニ箴四十

凡ての事例に於て幾許か缺ぐる所あり又到るところ汝に抵抗するものこれあるが爲なり

(一) 然ちば汝の安泰は總て外部のものを收得增加することにあらずして却て之を輕んじ又全く心より之を芟除することにあるなり而して是を以て唯利德財產のみを謂となすこと勿れ名譽を需め空しき賞讃を望むことをも併せいふなり是等はみな此の世と共に必ず過ぎ逝くべきものなり

若し熱切主に對ふの精神なき時は居る所の地も殆ど

二 箴四十
一〇十三

益する所なく又外部より求め得たる平安も亦何ぞ永く保たれん若し汝の心に眞正なる基礎なく則ち突然われに倚て立たざる時は假令變遷することありとも進歩することと是なかるべし何となれば若し時變の生じて之に纏るときは汝が嘗て遁避せし所のもの及び尚其餘のものにも再び遭ふべければなり

ホ詩五一
〇十二
ヘ弗三〇
十六
ト傳五〇
十一

(二)清き心と天の智惠を求むる祈禱

神よ願くは爾の聖靈の恩惠を以て我を强めたまへ力を心衷に與へて之を强くし我心の凡て無益なる心勞と憂愁を掃ひ去り又貴きと賤しきとに拘らず凡て如何なる物の難多なる望の爲にも誘はれず萬物を視て皆過ぎ往くものとなし我身も亦之と共に速に去るものと見なさしめ給へ何となれば天下のもの一として永久なるものなく萬物皆空にして靈の痛悶なればなり斯の如く萬物を推考するものは如何に賢明なる哉

チ約壹二
〇十七

リ傳一〇
十四、二
〇十二

主よ願くは我に天の智惠を與へ給へこれ我をして萬物に超ゆて爾を求め爾に遭ひ萬物に超ゆて爾を鍾愛

メ 歳二八 〇二三
ル 弗四〇 十四
チ 歳二〇 十一、十
ヌ 歳二〇 六 十三、一〇二

し萬物皆爾の智惠の治定に從ふを考想することを習はしめ給へ又願くは愼みて我に諛ふものを避け我に悖戻るものを忍ばしめ給へ何となれば言の風の吹くたびに蕩かされず姦佞なる諛に耳を傾けざることは智惠の要項なり斯の如くして我人の始めたる路を安全に進むべければなり

第二十八章　讒者の毒舌に對する事

(一)我子よ人もし汝に就て惡念を含み汝の聞くを好まざることをいふとも之を愁ふること勿れ汝は自ら定め

イ 彼前二 〇二三
十 一〇
ロ 約十六 〇三三

を最も惡きものとなし他に爾よりも脆き人ありと思ふこと勿れ

(一)若し墨に屬て歩まば浮薄のことを深く重んぜざるべし禍のときに沈默し又心に於て我に向ひ人の批判を憂へざることは小ならざる智惠なり

(二)汝の平安をして人の舌上にあらしむること勿れ蓋は假令彼等の汝を評して善となすも惡となすも汝の人となり是が爲に變らざればなり

眞正なる平和と眞正なる榮譽とは果して何處にかあ

○三　詩十六
○十八　加一〇
○二三　詩四二

る是等皆われに在るにあらずや人を悅ばすことを嗜まず又人の意に適はざることをも恐れざるものは多くの平安を享くべし凡て心の紛擾と心意の擾亂とは

（一）猥なる愛と虛しき恐怖より生ずるものなり

患難に罹るときは只管神を喚

第三十九章

求め且感謝すべき事

（一）主よ爾の聖名は永遠に讃むべきかな蓋は我この試誘と患難に罹るは爾の聖意なれはなり我は之を避ることを能はず必ず爾の下に遁るこれ爾われを扶け又之を

○十四　詩廿五
○八　詩廿五
○イ約十二、二七、二八
○詩十一、十〇
○六　詩百十

以てわが益となさしめ給はんことを願ふなり

（二）主よ今われ禍に罹れり我心之が爲に泰かならずして現時の苦痛は我甚だ憂ふる所なり我愛する聖父よ今我何をか云はん我は究厄の間に圍まれたり願くは此時より救ひ給へ然れどもわれ此時に逢ふは是わが大に低くゝ爲されて爾に濟はれ汝の榮光を彰はさんが爲なり主よ願くは我を濟ひ給へ我が如き憐むべき究夫にして主によらざれば何をか能く爲し又何處にか往き得んや主よ願くは此災難に當てわれに忍耐を與へ

ハ詩百十八〇六　給へわが神よ我を助けたまへされば如何ばかり痛苦を受るとも我之を恐れざるべし

ニ太廿六〇四ニ　我今これらの困難に當てわれ又何をかいはん主よ聖意を成したまへ我は正に痛傷を受くべきものにして

ホ詩五九〇十七　實に之に耐ゆべきなり嗚呼願くは颷風吹き畢て萬事再び靜和に復する時まで忍んで之に耐へ得んことを然れども我神よわれに憐恤を賜ふ神よ爾の全能の聖手は嘗て屢ばわれに爲し給ひし如く此誘惑をわれより取去り其暴威を減じたまふに足る是我をして之が

ヘ詩七七〇十一　爲に全く倒れしめざらんが爲なり而して是はわが爲に甚だ難き所なれども最高者の右手を轉じ給ふは容易なりとす

第三十章　神の祐助を願ふこと及び恩寵の再收を確く信ずる事

イ翁一〇七　(一)我子よわれは艱難の日に力を與ふる主なり汝もし寧和ならざる時は我に來れ

爾が自ら祈禱に向ふことの甚だ遲々たるは是則ち天の慰藉を最も大に妨ぐることなり何となれば爾切に

ロ但三〇
二八

われに乞ふ前に現に多くの安慰を求め外部のものを以て自ら慰むこれに因て汝徐かに思へわれ己を托す

ハ詩一〇

る者を救ひわが外に有力なる救護も有益なる謀議も

（一）又勁固なる治術もこれなきことを汝の能く察諒するに至るまでは萬物殆ど爾に益する所なし

〇十八
ハ詩三七

然れども今は風風も既に收りて爾の心落着たれば我殆慍の光によりて氣力を恢復すべし蓋はわれは諸てのの事を完全に補ふ而已ならず豐かに最も充盈に之を補修する爲に最も近き所にありと主いひ給ひたれば

ハ創十八
〇十四

ニ路八〇
二五

〇一
イ詩十四

ホ詩二七
〇十四

ヘ太六〇
三四

なほ我に何事か成し難からん又われは言に約じて之を行はざる者のごとくならんや爾の信は安くにあるや數乎ことして堅く立ち忍び勇を鼓して事に耐へよされば時至りて安慰汝に來らん我はいふ待よ我を待て我來りて爾を醫さんと

（二）汝を憂へしむるものは誘惑なり汝を驚かすものは空しき恐懼なり未來の禍福を杞憂する念は何をか又爾に到らしむる只悲愁の上に悲愁を來すにあらずや一日の勞苦は一日にて足れり未來の禍福は或は興ちき

三四六〇

〇十四 ヘ十六

〇十四 ホ廿二

ト約十四〇一

二正 ニ廿八〇

〇十四 ハ廿十八

ることあり是等の爲に喜憂するは空しくして益なきことなり然れども人は時として斯る忘想の爲に迷はさるゝものにして仇敵の勸告に斯く容易に誘わるゝ

(二)は心意未だ軟弱なる記號なり彼の仇汝を欺罔せんためには其云ふ所の虛實を意とせず又汝を顚敗するに目前の愛を以てするか又は未來の恐れを以てするかを意とせざればなり此故に汝等心に憂ふるなかれ又懼るゝ勿れ我に信托し我矜恤を確信すべし汝もし我に最も遠しと思ふ時はわれ屢汝に最も近くもし萬

十ホ ヘ一〇

チ徒十四〇二二

物殆ど蕩盡せりと思料する時は往々最大なる報酬の利得手に接してあるなり諸事意に逆ふて生ずるとも これ悉く損失に歸したるにあらず必ず現時の感情に從ふて事物を料定すること勿れ又悲哀は如何なる所より來るとも之を避るの望み全く奪れたるが如くに之を感じ之に降服すること勿れ假令われ暫しの間爾に多少の患難を送り若くは汝が冀望する所の安慰を回收するとも是を以て全然捐てられたるなりと思ふべからずこれ則ち天國に到るの路なればなり

○二二 ヤ鈴十四

汝及び其餘の我臣僕が災厄の爲に修練を受くるは其
冀望に從ふて萬物を領有するよりも宜しきこと必然
なり我は汝の秘想を知り又時ありて甘味を覺ゑざる
は汝の數の爲に甚だ宜しきことなるを知れりてれ恐
ちくは汝をして昌榮の爲に心驕りて汝の分にあらざ
る事を以て自ら喜ぶことなからしめんが爲なり我予
へたるものは我又之を奪ふことを得我意に適ふ時に
は又之を復さん我予ふるものは則ちわがものなり之
を回收する時も爾のものを取るにあらず蓋は凡ての

リ雅一〇 十七

十五 ヤ鈴八〇

善き恩賜と完全き賜ものは我ものなればなり我若し
災厄若くは凡て如何なる困難を爾に送るとも歎息す
ることなかれ又心を失ふことなかれ我速に汝をすくひ
凡て爾の患難を喜悅に變らしめんわれ汝に對して斯
く行ふ時と雖も我は正義にして大に讃美せらるべき
ものなり
汝もし智ありて正しく此事を察諒せば假令如何なる
患難に罹るとも決して悲哀することなく反て大に喜
び且感謝すべきなり否是のみならずわれ愁苦を以て

○六 ヤ鈴十五

ヌ伯六〇 十 雅一〇三

箴一〇三十×箴六〇

汝を懲戒しめ汝を寛容せざるを第一の喜びとなすべし

ル約十五〇九

「我父のわれを愛したまふ如くわれ亦汝らを愛す」と

チ路八〇十五

は嘗て我愛したる使徒等に云ひし所なり我は實に彼等を俗世の歡樂におくらずして大なる苦難におくり榮譽に送らずして侮蔑に送り怠惰に遣らずして勞働に遣り安息に遣らずして忍んで多くの秋實を生せしめんが爲に遣りたるなり我子よ汝是等のことを憶べ

第三十一章　凡ての受造物を輕んじ創造者を溫ぬべき事

イ詩五五〇六

ロ太六〇二二

(一)主よわれ若し人の爲にも又他の受造物の爲にも妨げられざる程度に達すべきものなれば更に大なる恩寵を領けざるべからず

蓋は尙事物のわれを牽ねる間はわれ自由に飛上りて主に至ることを得ず願くは鴿の如く翼のあらんことをさらば我飛去りて安息を得ん」とは則ち自由に飛ばんことを望みしものゝ云ひし所なり何ものか着眼の純晴より靜なるものあらんや又孰か地上に如何なる物をも望まざる人より自由なるものあらんや是故

に人たるものは凡ての受造物に凌駕し全く自己を脫して殆んど心意を漠くし受造物の中には萬物の造主なる爾に省たるものの曾てこれなきことを見るべきなり人はまた凡て受造物の愛より脫せざれば自由なる心意を以て神の事に從ふこと能はず是を以て神に事へて謹肅なる人の實に稀なるは滅ぶべき受造物より完く自己を離隔するものゝ稀なるに由る

是を得んゝ爲には恩寵を多く受ることを要すこれ靈を

(一)高くし之をして自己に超ゑて登揚せしむる爲なり

人若しその靈を高め凡ての受造物を離れて全く神と一致せざれば假令如何なる事を知り如何なる物を有するとも甚だ貴むに足らざるなり人若し無限永遠獨一至善なるものを重んぜずして他のものを重んぜば其微にして碌々たること蓋し久しからん凡そ神にあらざるものは皆虛無にして虛無となすべきなり

(一)虔信にして靈の照明を受けたる人の智惠と博學專攻なる學者の智識とは大に異れるものなり神の權能より流れ出る所の學識は人の智能を苦めて得たるもの

より更に尊し

(二)沈思を庶幾ふもの多しと雖も彼等は之を得るに必要なることを專ら實行せざるなり人々の休徵と肉に感ずるものを安息とし全く私慾を殺すに用ひざるは大なる障碍なり

靈に屬するものと稱せらるゝ所のわれらは十分に心意を注ぎて自己の心意を慮ることと殆んど稀にして却て浮薄賤劣なる事物の爲に懸念し又深く痛苦を嘗むることは如何なる靈に導かれ又何を假昌したるか

を知らざるなり嗚呼吾人は微かに之を想起することあるも復直に之を忘れて愼重勵正なる調査を以て我功業を量らざるなり吾人は我愛慾のある所を意はず又凡てわが動作に存する不潔をも慨歎せざるなり是れ凡ての肉皆其道を濫したれば大洪水の來りたるがごとしされば我心の慾いたく亂れこれより生ずる我動作も亦濫れざるを得ざるはこれ內部の勇氣の缺たる明證なり夫れ善良なる生命は淸き心より生ずる結果なり